

令和3(2021)年度

研究のまとめ

主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる
～説明的な文章を読み取る力の育成を通して～



大阪市立東井高野小学校

は　じ　め　に

新しい学習指導要領全面実施2年目が終わろうとしています。学習指導要領で「一人ひとりの児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り抜き、持続可能な社会の創り手となることができるようになることが求められている」と示されています。

また、大阪市教育振興基本計画は令和4年度より基本理念を「すべての子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力を備え、健やかに成長し、自立した個人として自己を確立することをめざします。あわせて、グローバル化が進展した世界において、多様な人々と協働しながら持続可能な社会を創造し、その担い手となることをめざします。」とし、以下の3つの最重要目標を定めています。

1. 安全・安心な教育の推進
2. 未来を切り拓く学力・体力の向上
3. 学びを支える教育環境の充実

そこで、本校では、昨年度までこの新学習指導要領や大阪市教育振興基本計画の趣旨に従い、算数科で「共に学び、ともに高め合う子どもを育てる」をテーマとし授業改善に努めました。

今年度から研究教科を国語科とし、昨年度までの算数科の成果を基に改めて取り組むこととしました。

主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる ～説明的な文章を読み取る力の育成を通して～

を研究主題とし、研究の視点として以下の4点としました。

- ①学習の見通しをもつ時間の設定と、意欲が高まる学習課題の工夫
- ②自分の考えをもつための工夫
- ③対話から気づきが生まれる交流の場の工夫
- ④自らの学びを説明したり評価したりする工夫

本校は、全国学力・学習状況調査や大阪府新学力テスト（すくすくウォッチ）、大阪市小学校学力経年調査から「主体的対話的で深い学び」を実現するための学力向上が喫緊の課題です。全ての教科の根源となる国語科の授業研究・討議を深め、さらに、「大阪市子ども読書活動推進計画」との整合性も図り、教職員の力を結集し、大阪市教育振興基本計画の基本理念が達成できるよう研究に邁進する所存です。

令和4年3月

大阪市立東井高野小学校
校長　木村　憲次

目次

はじめに

I. 研究の概要

1. 研究主題	1
2. 研究主題設定の理由	1
3. 主題について	2
4. 研究の視点と内容	3
5. 授業モデル	5
6. 研究の組織	6
7. 研究の計画	7

II. 各学年の取り組み

1. 第1学年	9
「いろいろなふね」	
2. 第2学年	17
「ビーバーの大工事」	
3. 第3学年	25
「自然のかくし絵」	
4. 第4学年	33
「ヤドカリとイソギンチャク」	
5. 第5学年	41
「和の文化を受けつぐ-和菓子をさぐる」	
6. 第6学年	49
「町の幸福論-コミュニティデザインを考える」	
7. なかよし(特別支援学級)	59
「みいつけた」	

III. 研究のまとめ

1. 研究の成果	65
2. 今後の課題	65

おわりに

I 研究の概要

1. 研究主題

主張的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる
～説明的な文章を読み取る力の育成を通して～

2. 研究主題設定の理由

本校では、「豊かな心を育み、自らの個性や能力を伸ばすたくましい子どもを育てる」を学校教育目標に掲げ、めざす子ども像を「やさしい子・たくましい子・考える子」とし、教育活動を進めている。

昨年度までは算数科を研究教科として4年間実践を進めてきた。その結果、全国学力学習状況調査ならびに大阪市小学校学力経年調査において、大阪市の平均を恒常的に上回る水準まで子ども達の学力を高めることができた。一方、応用・活用については課題が残っていたため、問題解決型学習を積極的に取り入れるとともに、自分の考えや意見を相手に伝えることや相手から聞いたことを自分で考えることを意識させる取り組みを行い、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて大きな収穫があった。

これらの成果をふまえ、さらに本校の子ども達に必要な力として次のような課題があがってきた。

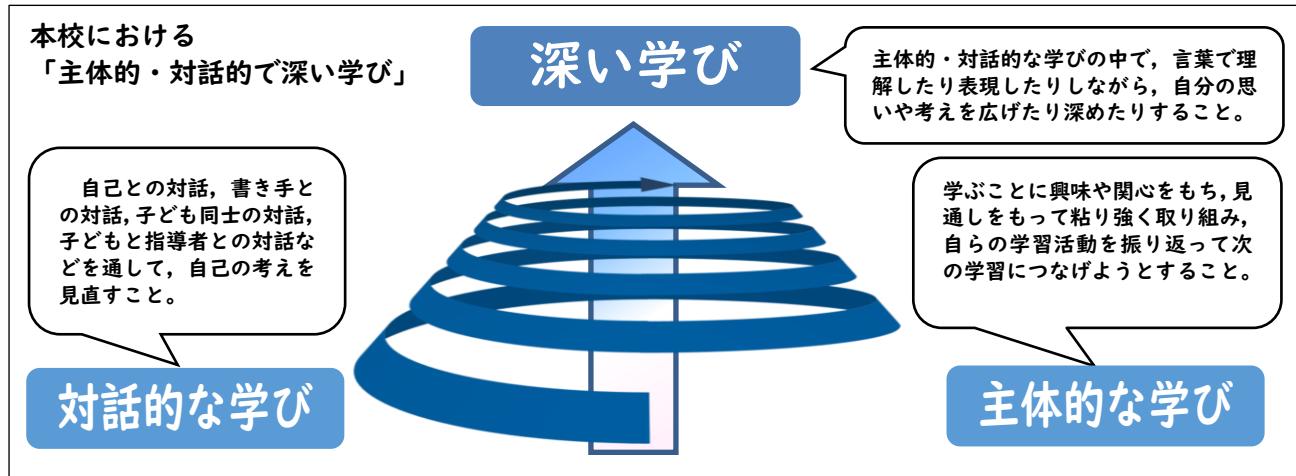
- ・文章をしっかりと読まず、その結果、考える力が十分育っていない。
- ・文章や問題を最後まで読むことができず、意図や内容の把握ができていない。

これらの課題解決のためには、すべての学習の基本である国語力の「読む力」を育成する必要がある。「読む力」を育成する中で、子ども達が主体的に考え、考えることを通して意欲的に対話的な学びを行うことは、本校のめざす子ども像「考える子」の育成にもせまるのではないかと考えた。

令和2(2020)年度の学習指導要領改訂では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブラーニングの視点に立った授業改善)が求められている。「アクティブ」すなわち、「能動的」および「主体的」、そして、「対話的」、「深い学び」は、今後の教育の重要な概念になると思われる。

しかし、「主体的・対話的な学び」と「深い学び」は並列関係ではなく、対話的な学びが欠けていたり、対話があっても、そこに主体性がなかつたりすると深い学びにはつながらないと考えられる。

このことを踏まえて、国語科における「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の関係を、主体的な学びと対話的な学びを往還しながら深い学びに向かっていく3か年の研究計画を立案することとし次のように図式化した。



3か年の研究計画では、1・2年目に「主体的な学び」「対話的な学び」を重点課題として研究をすすめながら、子ども達についた力を基に3年目に「深い学び」として結実することを目指すものとした。

そこで、研究1年目の本年度は、「主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる～説明的な文章を読み取る力の育成を通して～」を研究主題として、指導のあり方を探っていくことにした。

3. 主題について

- 主題的に考えると、「主体的な学び」つまり学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげていく学び方を通して、考えを広めたり深めたりすること。
- 共に学び合うとは、「対話的な学び」つまり自己との対話、書き手との対話、子ども同士の対話、子どもと指導者との対話などを通して、自己の考えを見直しながら学級全体で考えを広めたり深めたりすること。

この「主体的な学び」「対話的な学び」を説明的な文章を読み取る学習を通して実現したい。その際、文章の意味内容を理解するだけでなく、文章に即して豊かに想像し、読みを味わい深めることを目指す。

そのために

内容の大体をとらえる → 言葉の意味・解釈を知る → 自分の考えを持つ → 考えを共有する → 自分の考えを広げる

を基本的な学習の流れとし、子どもの発達段階や実態に応じて指導の工夫改善を行う。

4. 研究の視点と内容

「主体的な学び」「対話的な学び」を説明的な文章を読み取る学習を通して実現するための研究の視点として以下の4点を設定した。

- ① 学習の見通しをもつ時間の設定と、意欲が高まる学習課題の工夫
- ② 自分の考えをもつための工夫
- ③ 対話から気付きが生まれる交流の場の工夫
- ④ 自らの学びを説明したり評価したりする工夫

◎研究の視点が目指す子ども像

	学年	視点	目指す子ども像
主体的な学び	低学年	①	指導者と一緒に学習のめあてを設定し、学習の見通しをもって意欲的に取り組むことができる子ども
		④	学習内容と自分の体験を結び付けて考えていこうとする子ども
	中学年	①	指導者や友達と一緒に学習のめあてを設定し、学習の見通しをもって意欲的に取り組むことができる子ども
		④	学習内容と自分の体験や既習事項を結び付けて考えていこうとする子ども
	高学年	①	自分で学習のめあてを設定し、学習の見通しをもって意欲的に取り組むことができる子ども
		④	学習内容と自分の体験や既習事項を結び付けて考えたことを自分の言葉で表現しようとする子ども
対話的な学び	低学年	②	文章の中の重要な語や文を見つけ、感想をもつことができる子ども
		③	自分の考えをもった上で、その考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりすることができる子ども
	中学年	②	文章の中の中心となる語や文を見つけ、感想や考えをもつことができる子ども
		③	自分の考えを伝え、友達の考えを聞くことで、自分の考えと他者の考えを比較して、共通点や相違点に気付くことができる子ども
	高学年	②	文章の中から必要な情報を見つけたり論の進め方について考えたりすることで、自分の考えをまとめることができる子ども
		③	自分の考えを伝え、友達の考えを聞くことで、自分の考えと他者との考えを比較して、共通点や相違点などを共有し、批判的にも共感的にも捉えることができる子ども

◎研究の視点にせまるための具体

- ① 学習の見通しをもつ時間の設定と、意欲が高まる学習課題の工夫

○意欲的に取り組む導入の工夫

子どもが「読む意欲」を引き出したり、「読む必然性」を持ったりすることができるよう、事前に掲示物等の具体物の提示や「人、もの、こと」との出会い方を工夫する。他教科との横断的な導入も考えられる。

○学習の見通しをもつ時間の設定

授業のはじめに、子どもと指導者が一緒に学習計画を立てる時間を設定する。子どもの学びたいことを学習計画に入れることで見通しをもって学習に取り組むことができるようとする。

②自分の考えをもつための工夫

○読む力

段落分けや小見出し付け、要約を通し、文章の構成理解につなげる。キーワードやキーセンテンスを見つけ、叙述をもとに筆者の主張を読み取る。また、読み取ったこと図表化したりシンキングツールを取り入れたりすることにより、要約を通した子どもの読みを具象化できる。

○板書・ノート・ワークシートの活用と工夫

子どもの実態や単元に応じてノートやワークシートの内容や量を工夫する。書く内容を視覚的に捉えやすくするために、挿絵や吹き出しを活用する。また、板書もノートやワークシートをふまえた内容にするように工夫する。

③対話から気付きが生まれる交流の場の工夫

○交流形態の工夫

全体で交流する前に、ペアやグループなど小集団での交流を効果的に取り入れ、意見の交流が活発に行えるような場の設定を工夫する。話し合いのルールや話型、ハンドサイン、声のものさし、聞き方・話しかけなどを教室に掲示する。

○伝え合う場の工夫

朝の会や終わりの会などでスピーチを行ったり、学習したことを様々な形態で発表したりして伝え合う場を工夫する。発表するだけでなく、友だちの発表を聞いて感想を述べたり質問したりするなど、互いに交流できるようにする。

④自らの学びを説明したり評価したりする工夫

○自己評価

子どもの実態や学習内容に応じて、ノートやワークシートに、関心・意欲、理解などについて自己評価できる欄を設けたり、一言感想や学んだことを短い文章で表したりする。学び方や内容の振り返りを通して、主体的に次時への見通しがもてるようとする。

○相互評価

友だちの発表を聞いてよかったですや分かりやすかったですなどを伝え合うようにする。

○研究の視点にせまるための基礎・基本の力の育成

○音読の充実

「読む力」を涵養するための音読として、言葉や文のまとまりを意識して読むように指導する。また、繰り返し音読する楽しさを味わうことによって文章の内容を正しく捉えられるようになり、聞き手を意識して読むことで、読み取ったことが伝わるように表現しようとする意識を高めるようとする。一斉読み、リレー読み、交代読み、役割読み、指名読み、微音読など目的に応じて形態を工夫する。また、各学年に応じ「話す・聞くスキル」の活用も含めた音読カードを用いての系統立てた指導を行う。

○語彙力の育成

いろいろな場面で、難語句を自分で意味調べをする習慣をつけ、語彙力を増やせるようにする。漢字学習の際には漢字の意味にも触れ、既習漢字（熟語）を正しく活用できるようにする。

○読むための「書く」力の育成

日々の「文づくり」の交流などを通して、学習の感想を書いたり主題や要旨を書きまとめたりする活動、さらには個々の読みを記録したり他者と交流したりするための「書く」力を高めるようにする。

○学校図書館との連携

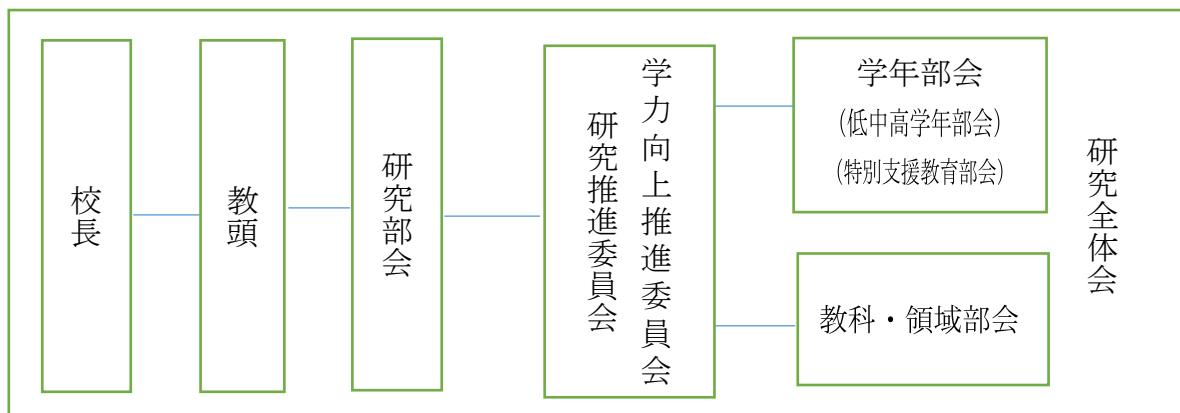
読書習慣の確立のために、学級文庫の充実を図るとともに、保護者や委員会活動による読み聞かせの場を設ける。国語科の教材文をもとに、関連した図書を団体貸し出し等を活用して発展読書とする。

5. 授業モデル

研究主題にせまるための、主体的な学び、対話的な学び、深い学びを意識した授業モデルを次のように示す。

構造と内容の把握	<ul style="list-style-type: none">前時までに学習したことを見直す。本時の課題を確認する。叙述を基に、文章の構成や展開を捉えたり、内容を理解したりする。	<p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none">自ら本時の学びに興味や関心をもたせ、見通しを立てさせる。子ども自身が知識や技能を振り返ることで、身に付けなければならぬものをつかませる。構成・展開などの読みための視点を示すことで、課題解決のための見通しをつかませる。
精査・解釈	<ul style="list-style-type: none">文章の内容や形式に着目して読み、目的に応じて必要な情報を見つける。書かれていることや書かれていないことについて、具体的に想像する。	<p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none">文章の中の重要な語や文を選び出したり、必要な情報などを見つけたりすることで、書き手との対話を通して具体的に想像する。
考え方の形成	<ul style="list-style-type: none">一人学びで課題を追究する。全体交流等で交流し、見方・考え方を深める。指導者による発問や交流からの新たな視点の提示で追究する。	<p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none">子ども自ら課題解決に向け、自分の体験などと結び付けて、読みを通して新たな考え方や方法を生み出すことができるようになる。 <p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none">必要に応じてペアやグループ、一斉など様々な形態で交流することで、新しい考えが発見できるようになる。 <p>【深い学び】</p> <ul style="list-style-type: none">指導者の働きかけ（深めの発問）や交流を通じて新しい視点の投入によってゆきぶり、今までにない考えを形成する。
共有	<ul style="list-style-type: none">本時の中でできしたこと、分かったことを振り返る。次時の見通しをもつ。	<p>【深い学び】</p> <ul style="list-style-type: none">課題に即して読みが深まったか、初めの読みと交流した後の読みとの変容はあるかを確認する。 <p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none">次時への追究意欲や、本時で学んだことを振り返り、自身の学びを自覚できる場面を設定する。

6. 研究の組織



組織	メンバー	活動内容
研究推進委員会	学校長 教頭 教務主任 研究部長 各学年代表者	<ul style="list-style-type: none"> ・研究主題の設定 ・研究内容の検討 ・各部会との連携 ・研究紀要作成の計画、運営
学力向上推進委員会	学校長 教頭 教務主任 学力向上推進担当 各学年代表者	<ul style="list-style-type: none"> ・学力向上の推進計画、運営 ・モジュール学習の推進 ・カリキュラムマネジメントの推進 ・メンター研修の計画、推進
研究全体会	全教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・研究計画、方針等の協議、共通理解 ・研究授業と研究討議会 ・研究の成果と課題についての協議、共通理解
学年部会 (低中高学年部会)	全教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導の構想 ・資料や教具の作成 ・学習指導案の作成 ・学年部授研究授業と研究討議会
教科・領域部会	各教科・領域主任	<ul style="list-style-type: none"> ・教材や教具の整備と充実

7. 研究の計画

	研究内容	その他
4	研究推進委員会①「研究組織の編成」 「研究主題・計画の検討」 「研究計画の立案」	特別支援教育研修会 メンター研修①
5 ・ 6	研究推進全体会 「研究主題・計画の決定」 「研究推進についての共通理解」 「研究授業・討議会の役割分担」	外国語指導研修 人権教育講演会
7	学年部会①「学年部指導案の検討（3年）」 3年学年部研究授業「自然のかくし絵」・討議会 国語科指導法研修会 講師 大阪成蹊大学教授 辻村敬三先生	学力向上効果検証授業 国語科全体研修会 キャリア教育研修会 ICT研修会（プログラミング）
8		P B S 研修 (大阪教育大学准教授 庭山和貴先生)
10	研究推進委員会②「指導案の検討（4年）」 4年研究授業「ヤドカリとイソギンチャク」・討議会・研修会 指導講評 大阪成蹊大学教授 辻村敬三先生 学年部会②「学年部指導案の検討（2年）」	市道徳部研究授業
11	研究推進委員会③「指導案の検討（6年）」 学年部会③「学年部指導案の検討（5年）」 2年学年部研究授業「ビーバーの大工事」・討議会 6年研究授業「町の幸福論 コミュニティーデザインを考える」・討議会・研修会 指導講評 大阪成蹊大学教授 辻村敬三先生 5年学年部研究授業「和の文化を受けつぐ-和菓子をさぐる」・討議会 研究推進委員会④「指導案の検討（1年）」	学力向上効果検証授業
12	1年研究授業「いろいろなふね」・討議会・研修会 指導講評 大阪成蹊大学教授 辻村敬三先生	メンター研修②
1	研究推進委員会⑤「研究紀要の計画」	プログラミング学習研修会
2	研究推進委員会⑥「研究紀要のまとめ」 「次年度の研究について」 学年部会④「指導案の検討（特別支援学級）」	道徳科研修会 メンター研修③ 学力向上効果検証授業
3	学年部研究授業・討議会（特別支援学級） 研究推進全体会「今年度の課題と成果」 「次年度の研究内容についての共通理解」	

II. 各学年の取り組み

1. 第1学年	9
「いろいろなふね」	
2. 第2学年	17
「ビーバーの大工事」	
3. 第3学年	25
「自然のかくし絵」	
4. 第4学年	33
「ヤドカリとイソギンチャク」	
5. 第5学年	41
「和の文化を受けつぐ-和菓子をさぐる」	
6. 第6学年	49
「町の幸福論-コミュニティデザインを考える」	
7. なかよし(特別支援学級)	59
「みいつけた」	

第1学年

国語科学習指導案

1. 日 時 令和3年12月8日（水）第5時限（13：50～14：35）
2. 場 所 第1学年2組教室
3. 学 年・組 第1学年2組 在籍21名
4. 単 元 名 のりもののことしだべよう（「いろいろなふね」 東京書籍 1年下）
5. 単元間の関連

前単元（第1学年6月）

本単元（第1学年11月）

次単元（第2学年10月）

前単元（第1学年6月）	本単元（第1学年11月）	次単元（第2学年10月）
<p>単元名 「どうやってみをまもるのかな」 ○事柄の順序に気を付けて、内容を正しく読む。</p>	<p>単元名 「いろいろなふね」 ○書かれていることを事柄ごとに正しく読み取る。 ○ほかの本を読んで調べたことをまとめる。</p>	<p>単元名 「ビーバーの大工事」 ○大事な言葉や文に気を付けてながら文章を読む。 ○ほかの本などを読んで調べたことをまとめる。</p>

6. 単元目標

- 事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉え、文章の中の重要な語や文を考えて選び出すことができる。
- ・共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関連について理解することができる。
 - ・それぞれの船について、「やく目」「つくり」「できること」の3つの観点に沿って、文章の中の重要な語や文を選び出し、書き表し方を工夫してまとめることができる。
 - ・自分が選んだ乗り物について調べ、「のりものカード」にまとめる活動に積極的に取り組むことができる。

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
<p>・共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関連について理解している。…（2）ア</p>	<p>・「読むこと」において、事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えている。…C（1）ア ・「読むこと」において、文章の中の重要な語や文を考えて選び出している。…C（1）ウ ・「書くこと」において、語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとめ方が分かるように、書き表し方を工夫している。…B（1）ウ</p>	<p>・これまでの学習や経験で気づいたことやできるようになったことを生かして見通しを持ち、積極的に、文章の中の重要な語や文を考えて選び出し、読んで分かったことをまとめて伝え合おうとしている。</p>

8. 指導にあたって

(1) 児童観

「読むこと」に関しては、6月単元「どうやってみをまもるのかな」の学習で、事柄の順序に気をつけて、文章の内容を正しく読み取る学習を行っている。叙述から適切な語や文を見つけて説明することができる児童がいる一方で、文章を読んでイメージを膨らませながら内容を読み進めることが難しい児童も多かった。中には文字を言葉として認識することが難しい児童も見られた。そのため、挿絵と文を対応させたり、実際に動作化して表現したりしながら文章の内容理解につなげていった。さらに、週1回の国語科のモジュール学習でも、大事な文章を見つける指導を続けてきた。その結果、自分の力で文章の中から必要な語や文を選び出すことができる児童が増えてきているが、まだ十分ではない。

「話すこと・聞くこと」に関しては、自分の考えを話したい、聞いてほしいという児童が多い。しかし、全体の場で発表することには自信を持てない児童もいる。そのことから、自分の考えに自信が持てるようにペアトークの時間を設けている。また、帰りの会で日直のスピーチを行い、少しづつ全体の前で話す経験を積ませている。聞くことでは、話を集中して聞くことが難しい児童もいる。話している人の方を向いて話を聞く指導を続けていることで、ハンドサインを使って反応できる児童が増えてきている。

「書くこと」に関しては、生活科で植物の葉の枚数や形、大きさなどを観察して自分で文章を書くなどの学習を継続的に行っている。初めはなかなか書き出せない児童もいたが、「～みたいな形。」や「～くらいの大きさ。」などの簡単な文型を確認することで、自分が観察した事柄を組み込みながら文章を書くことができるようになってきている。

(2) 教材観

本教材は、特徴的な機能を持った4種類の船を例として取り上げ、役目や構造、装備などについて説明した文章である。4種類の船の例示が同じ文章構成、同じ文型で説明されており、叙述に即して内容を正確に捉えることに適している。児童が身近に感じる自動車や電車といった乗り物と比べ、本教材で出てくる船は、どちらかというとなじみが薄く、日常的には利用しない乗り物である。しかし、初めて知ることも多く、好奇心を持って学習に取り組むことができるを考える。

本単元では、乗り物について調べたことを「のりものカード」にまとめる言語活動を設定している。その目的に応じて、「やく目」「つくり」「できること」を読み取る力が必要になる。また、カードという限られた範囲では、調べた文章をそのまま書き写すのではなく、必要な語や文を見つけて短くまとめる力が必要になる。乗り物という児童にとって身近で興味をもちやすい題材を生かして、主体的に学習に取り組むのに適した教材である。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、「のりものカード」を作るという単元全体の学習課題を確かめ、本教材を通して本文から必要な情報を読み取り、短い文章でまとめていくというカードの作り方を考えていくことを児童に伝える。また、様々な乗り物に興味を持てるようにするために、乗り物に関する図書を教室に置き、並行読書するよう声をかけ、今後の学習に意欲をもって主体的に取り組めるようにしたい。

第Ⅱ次では、「きやくせん」「フェリー」「ボート」「ぎょせん」「しょうぼうてい」の4つの船について、

まとめていく。何をするための船かを「やく目」、何があるのか、何を積んでいるのかを「つくり」、そのつくりがあるとどのようなことができるのかを「できること」とする3つの観点から内容の読み取りを行う。この時、教材文にそれぞれ色分けをして線を引いて読み取り、「～ためのふねです。」「～があります。」「～をつんでいます。」などの説明に使われる文型を押さえていくことで、文の意味を読み取る力をつけたい。読み取ったことを参考にワークシートにまとめていく活動では、教材文をそのまま書き写すのではなく、自分が読み取ったことを違う文型を使ってできるだけ短い文章でまとめさせる。同じ文型の読みを繰り返すことで徐々に、「読むこと」や「書くこと」に難しさを感じる児童も自信を持って取り組めるようにし、その後の活動へつなげていきたい。

第Ⅲ次では、教材文「いろいろなふね」で読み取った経験を生かして、乗り物について書かれた図鑑を用いて、自分の調べたい乗り物の「やく目」「つくり」「できること」を「のりものカード」にまとめる活動を行う。読み取りの際には、説明のための基本的な文型を押さえて読むように指導し、3つの観点から読み取れるようにする。文章を書く際は、情報と情報との関連を意識したり、教材文で学習した文型を生かしたりしてまとめられるようにする。書き終わったらペアで読み合い、3つの観点からまとめられているか、文字の誤りや分かりにくいくらいではないかを確認し合うようにする。友だちからの意見を参考に修正し、清書をしてカードを完成させる。また、読み手により分かりやすく伝えるために文章と対応した絵をかくよう指導する。図鑑などがうまく読み進められない児童には、教科書と同じ文型に書き換えた文章を用意する。これらの活動を通して、図鑑や科学絵本などを用いて知りたいことについて調べるための基礎力を身につけさせたい。

第Ⅳ次では、作成した「のりものカード」を交流し、友だちのカードを読んで初めて知ったことや文章の分かりやすさなどについて感想を伝え合う。また、作成したカードは教室内に掲示し、自由に読み合えるようにすることで、本単元の学習を振り返らせたい。

9. 学習計画（全13時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	○乗り物のことを調べて「のりものカード」にまとめるという単元全体の学習課題に興味を持ち、学習の見通しを持つ。	<ul style="list-style-type: none"> これまでに見たり乗ったりしたことのある乗り物について話し合せ、乗り物への関心を引き出す。 指導者が作成した「のりものカード」の例を示し、学習課題への興味を持たせる。 「いろいろなふね」の学習を通してカードの作り方を考えいくことを伝え、教材文を読む目的意識を持たせる。 教室に「のりものの本コーナー」を設置し、児童への意欲付けを図る。
	2	○教材文を読んで、内容の大体を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> どんな船が出てくるのかに気を付けながら、全文を音読させる。 「きやくせん」「フェリーボート」「ぎよせん」「しょうぼうてい」の4種類の船について説明していることを確かめる。 意味の捉えにくい語句の確認をする。

			<ul style="list-style-type: none"> ・次時からはそれぞれの船について詳しく読み取り、まとめていくという学習課題を知らせる。
II	3	○「きやくせん」の内容を読み取り、「やく目」「つくり」「できること」の観点に沿って、読み取ったことをカードにまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・②～④段落を音読させる。 ・「きやくせん」の「やく目」「つくり」「できること」が書かれている部分に色分けをして線を引かせる。 ・3つの観点ごとに、カードにまとめさせる。
	4	○「フェリーボート」の内容を読み取り、「やく目」「つくり」「できること」の観点に沿って、読み取ったことをカードにまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・⑤～⑦段落を音読させる。 ・「フェリーボート」の「やく目」「つくり」「できること」が書かれている部分に色分けをして線を引かせる。 ・「きやくせん」と同じ文型で書かれていることを確認し、説明に使われる文型を押さえる。 ・3つの観点ごとに、カードにまとめさせる。
	5	○「ぎょせん」の内容を読み取り、「やく目」「つくり」「できること」の観点に沿って、読み取ったことをカードにまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・⑧～⑩段落を音読させる。 ・「ぎょせん」の「やく目」「つくり」「できること」が書かれている部分に色分けをして線を引かせる。 ・これまでに学習した2つの船と「ぎょせん」の文章構成や文型を比較して、共通点や相違点を確認させる。 ・3つの観点ごとに、カードにまとめさせる。
本時	6	○「しょうぼうてい」の内容を読み取り、「やく目」「つくり」「できること」の観点に沿って、読み取ったことをカードにまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・⑪～⑬段落を音読させる。 ・「しょうぼうてい」の「やく目」「つくり」「できること」が書かれている部分に色分けをして線を引かせる。 ・3つの観点ごとに、カードにまとめさせる。 ・さまざまな「つくり」がある中で、なぜ「ポンプ」と「ホース」を取り上げているのかを考えさせる。
	7	○「いろいろなふね」で学習したことをまとめ、文章全体の構成を捉える。	<ul style="list-style-type: none"> ・①段落が話題提示、⑭段落が全体のまとめであることに気付かせる。 ・「始め（話題提示）」「中（4つの船の説明）」「終わり（まとめ）」の3つのまとめになっていることを捉えさせる。 ・説明に使われている文型を確かめさせる。 ・「だから」や「そのために」という接続詞を使って、情報と情報との関連について確認させる。

			<ul style="list-style-type: none"> 4つの船について同じ観点でまとめたことや、文型に共通点があることを確かめさせる。 これまでの学習を生かして、次時からは自分で選んだ乗り物について「のりものカード」にまとめるという学習課題を知らせる。
III	8 9	○乗り物の本を読み、調べたいことを見つける。	<ul style="list-style-type: none"> どの本を選び、どんな乗り物について調べるのかを考えさせる。 本に書かれていた内容を、「やく目」「つくり」「できること」の観点を踏まえて読み取らせる。
	10 11	○調べて集めた情報を3つの観点に整理して、カードに書く。	<ul style="list-style-type: none"> 前時までに調べた情報を整理させ、カードに書く内容を確かめさせる。 「やく目」「つくり」「できること」の3つの観点が調べられているか、「やく目」と「つくり」「できること」が関連しているかどうかについて確認させる。 下書きしたものをペア同士で読み合い、友だちからの意見を参考に修正し、清書させる。
IV	12 13	○作ったカードを交流して、単元の学習を振り返り、分かったことや身につけたことを確かめる。	<ul style="list-style-type: none"> 作成したカードの内容について、「いろいろなふね」の文型を活用して紹介させる。 友だちの発表を聞いて、よかつたところや気付いたことを交流させる。 作ったカードは教室に掲示し、自由に読み合えるようにする。

10. 本時の学習（6／13）

①本時の目標

- 「しょうぼうてい」の内容を読み取り、ワークシートにまとめることができる。

②本時の展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 本時の課題を確認する。	・前時までの学習を振り返り、本時のめあてを確認させる。 ⑥ 「しょうぼうてい」について、カードにまとめよう。	一斉	
	2. ⑪～⑬段落を音読する。	・「しょうぼうてい」の説明部分を確認させる。 ・「やく目」「つくり」「できること」を意識しながら音読させる。	一斉	
精査・解釈	3. 書かれていることを読み取る。 ・ペアで交流する。 ・全体で交流する。	・「しょうぼうてい」の「やく目」「つくり」「できること」が分かるところに、色分けをして線を引かせる。 ・選んだ理由も言わせるようにし、「～ためのふねです。」「～をつんでいます。」などの説明に使われる基本的な文型を確認する。	個人 ペア 一斉	・「しょうぼうてい」について、3つの観点別に読み取ることができる。
考え方の形成	4. 「しょうぼうてい」について読み取ったことをカードにまとめることをカードにまとめる。 ・ペアで交流する。 ・全体で交流する。	・「やく目」「つくり」「できること」の3つの観点からそれぞれまとめさせる。 ・前時までの学習を参考に、できるだけ自分でまとめさせる。 ・「やく目」「つくり」「できること」がそれぞれ書けているかどうか、短い文章にまとめられているかを確認させる。 ・映像を見せ、さまざまな「つくり」がある中で、なぜ「ポンプ」と「ホース」を取り上げているのかを考えさせて、これからの中の学習へとつなげさせる。	個人 ペア 一斉	・重要な語や文を落とさずに、まとめることができ。
共有	5. 学習の振り返りをする。	・「しょうぼうてい」について、分かったことや思ったことを書かせる。	個人 一斉	・本時の学習を振り返ることができる。

11. 板書計画



12. 本実践の考察

(1) 主体的な学びを生み出す工夫

本教材は四つのふねを題材とした説明的文章である。四つのふねは、児童が身近に感じる自動車や電車といった乗り物と比べると馴染みが薄く、日常的には利用しない乗り物で構成されている。しかし、読み取りを通して児童が写真を見て持つイメージとは違う乗り物の役目・構造・装備などが分かり、関心を持って主体的に学習に取り組むことができた。本単元は自分で調べた乗り物の説明的文章から読み取ったことを「のりものカード」にまとめる言語活動を設定した単元であり、「やく目」「つくり」「できること」の三つの観点に分けて読み取り、短い文章でまとめる力が必要であった。そのため、叙述の意味のまとめを意識して音読をしたり、説明に使われる基本的な文型を抑えたりしながら内容をきちんと読み取ることができるような指導を心掛けた。そこで二つの手立てを中心に取り組んだ。

一つ目は、「やく目」「つくり」「できること」にそれぞれ色分けをした線を引いて読み取りを進めた。一つ目の「きやくせん」についての読み取りを行う際に、「～ためのふねです。」「～があります。」「～をつんでいます。」などの説明に使われる基本的な文型を丁寧におさえ、「やく目」「つくり」「できること」を読み取るキーワードとして提示した。そうすることで、それらをヒントに内容の理解をし、根拠を持って読み取りを進めることができた。また、色分けをして線を引いたことで、教材文の内容を整理でき、スムーズにカードにまとめる活動に取り組むことができた。

二つ目は、教材文に出てくる四つのふねについて同じ文型の読み取りを繰り返し行った。説明に使われる基本的な文型を意識して繰り返し読み取りを行うことで、すべての児童が自分の力で読み取り、まとめることができるようになった。その結果、これまで乗物図鑑の写真ばかりを見ていた児童も、説明文に興味を持つようになり、並行読書の質も向上したように感じた。

第Ⅰ次で児童は、「のりものカードを作る」という単元全体の学習課題を確かめ、見通しを持つことができた。指導者の作ったのりものカードを見せたことや、乗り物に関する図書を教室に置いたことで、学習課題に興味を持ち、主体的に学習を進められたのではないかと考える。

第Ⅱ次の学習では、「きやくせん」「フェリーボート」「ぎょせん」「しょうぼうてい」の四つの船について、のりものカードにまとめた。説明に使われる基本的な文型を提示し、それをもとに「やく目」「つくり」「できること」の三つの観点に分けて読み取ることができた。また、カードにまとめる時には、教材文をそのまま書き写すのではなく、より短い文章でまとめることができた。初めは自分で書き進めることができ困難な児童も見られたが、同じ文型の読みを繰り返すことで、全員が短い文

章でカードにまとめることができるようになった。また、省略した部分をその理由も加えて説明できる児童も多くなった。

第Ⅲ次では、教材文「いろいろなふね」で読み取り、カードにまとめた経験を生かして、自分の選んだ乗り物について図鑑を用いて「のりものカード」にまとめの活動を行った。読み取りの際には再度、説明のための基本的な文型を確認したことで、全員が「やく目」「つくり」「できること」の3つの観点に分けて読み取ることができた。また、たくさんある「つくり」の中から「やく目」と「つくり」の関連を意識し、選択することができている児童も多かった。

第Ⅳ次では、作成した「のりものカード」を交流し、感想を伝え合った。図鑑の文章と比べて短い文章でまとめることができ、カードにまとめる良さを感じることができた。また、作成したカードは教室内に掲示し、自由に読み合い、本単元の学習を振り返ることができた。

(2) 対話的な学びを生み出す工夫

新型コロナウイルス感染症のこともあり、1学期はほとんどペア活動ができず、自力解決と一斉での交流を中心とした授業がほとんどだった。2学期からは少しずつペアでの意見交流の場を設けてきた。全体の場では自信をもって発言しにくい児童も、ペアで伝え合い、友だちに自分の考えを認めてもらうことで自分の考えを発言しやすくなかった。また、友だちの考えを聞いて、自分の考えをよりよいものに工夫することができる児童もいる。しかし、ノートやプリントに書いた文章を読み合うだけになってしまい、考えを深める交流までには至らない児童も多い。そこで、本単元では「自分の考えを友だちに伝え、共通点や相違点を見つけ、よりよい考えを導き出すこと」を交流の目標に掲げて指導・支援を行った。

本時でも意見の交流の場を設定した。同じ文型の読み取りが4回目であったこともあり、ほとんどの児童が自分の力で短くまとめることができた。そのため自信をもって自分の考えを伝えることができていた。しかし、児童の考えは共通点がほとんどで、対話から発見が生まれる交流には課題が残った。今後も「自分の考えとその理由」を活発に交流できるよう指導を継続していきたい。

13. 成果と課題

- 教室に乗り物の図鑑を置き、並行読書の声をかけることで乗り物に興味を持って学習に取り組むことができた。
- それぞれの乗り物について「やく目」「つくり」「できること」に色分けしながら読み進めることで、説明に使われる基本的な文型を理解し、短い文章でまとめることができるようにになった。
- 初めはカードにまとめることに苦手意識があった児童も、同じ文型の読み取りを繰り返すことで最後には自分で興味を持った乗り物について調べ、自分の力でカードにまとめることができた。
- 教材文に出てきた文型に捉われすぎて、図鑑を使って調べる際に異なる文型で書かれていると戸惑う様子も見られたので、「やく目」「つくり」「できること」の意味をもう少し抑える必要があった。
- ペア活動の際、書いたことの確認に留まるのではなくて、考えを深める交流へと変わっていけるような継続した指導が必要である。
- 学習活動にかかる時間に個人差があり、早くできた児童が待っている時間も長かったため、そういった児童への指示の出し方に改善の余地があった

第2学年

国語科学習指導案

1. 日 時 令和3年11月9日（火） 第5時限（13:50～14:35）

2. 場 所 第2学年2組教室

3. 学 年・組 第2学年2組 在籍23名

4. 単 元 名 どうぶつのひみつをさぐろう。

（「ビーバーの大工事」東京書籍 2年下）

5. 単元間の関連

前単元（第1学年10月）

本単元（第2学年11月）

次単元（第3学年10月）

単元名
のりものをしらべよう
教材名
「いろいろなふね」
○ 書かれていることを事柄ごとに正しく読み取り、ほかの本を読んで調べたことをまとめた。

単元名
どうぶつのひみつをさぐろう
教材名
「ビーバーの大工事」
○ だいじな言葉や文に気をつけながら文章を読み、ほかの本などを読んで調べたことをまとめた。

単元名
パラリンピックが目指すもの
教材名
「パラリンピックが目指すもの」
○ 大事な言葉や文を見つけながら文章を読んで、書かれていることを要約する。

6. 単元の目標

- 動物について書かれた本や文章を読み、わかったことをクイズにして紹介することができる。
 - ・ビーバーやほかの動物に关心を持ち、進んで教材文を読んだり、図鑑や他の本を読んで調べたりする。
 - ・文章の中の重要な語や文を考えて選び出すことができる。
 - ・文の繋がりに気をつけて、クイズの問題と答えを書くことができる。
 - ・自分の考えを伝え、友だちの考えを聞いて話し合う。

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。C(2) ウ	・文章の中の重要な語や文を考えて選び出している。C(1) ウ ・語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとめが分かるように書き表し方を工夫している。	・これまでに学習したことを振り返って学習課題を明確にし、学習の見通し持って、進んで文章の中の重要な語や文を考えて選び出し、動物について書かれた本や文章などを読み、わかったことなどを紹介しようとしている。

8. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、1年生の時に「いろいろなふね」の学習で、書かれていることを事柄ごとに正しく読み取り、ほかの本を読んで調べたことをまとめた学習活動をしている。

「読むこと」に関しては、前単元の説明文「サツマイモのそだて方」で、文章に書かれている内容を読み取るとともに、二つの文章を比べて読み、説明の仕方の違いに気付かせる学習を行ってきた。その際、読み取りについてはおおむね理解している児童が多かった。また、二つの文章を比べる学習でも、互いのよさや共通点、相違点から違いに気付ける児童がほとんどであった。しかし一方では、具体的に言葉や文章を抜き出すことに難しさを感じる児童も多い。

「話すこと・聞くこと」に関しては、自分の考えを話したい、聞いて欲しいという積極的な児童と、明確な答えや考えを持っているものの全体の場で発表することには、不安や恥ずかしさなどから消極的になる児童とに分かれる。積極的な児童は、考えが浅く思ったことをそのまま発言することが多々あり、少しの時間考えてから発表するように指導している。また、消極的な児童は様子を見ながら指導者が指名することで発表を促し、少しづつではあるが発表の経験を積ませている。そのため、本学級では、考える時間はペアトークを多く取り入れている。互いの意見を伝え合うことで両者にとって深い学びにつながり、ペアで発表させることで恥ずかしさも解消されている。

「書くこと」に関しては、誤字脱字が多く、文章が話し言葉になる児童がいる。また、「はじめ、中、終わり」の文章構成や書き方の順序についてわからない児童も少なくはない。そのため本学級では例文を提示したり、書き方の文型を指導したりすることで、少しづつではあるが文の書き方や文章構成を理解して書ける児童が増えてきている。

(2) 単元観

本教材「ビーバーの大工事」は、ビーバーの生態について、体の構造や機能を関連させて説明した文章である。また、ビーバーが丈夫な歯や手といった身体能力を生かして、外敵から身を守るために安全な巣を作る様子が擬態語や擬声語、比喩表現などを用いて、分かりやすく書かれている。

この教材の特徴は、「木を切り川へ運ぶビーバー」「ダム作りをするビーバー」「巣を作るビーバー」という三つの意味段落の構成を見出しで明示しているため、まとまりごとに体の特徴や行動を見つけることに取り組みやすい。興味を持ったことや驚いたことを文章から選び出してクイズを作ることで、楽しみながら学習を進めることができる単元である。また、文章と一緒に、絵や写真が添付されており、それらと文章を対応しながら読んでいくことで、具体的にイメージしやすくなっている。ビーバーの行動や体の仕組みを詳しく知ることで、他の動物のひみつについても興味を引き出すことができる教材である。

(3) 指導観

本単元の学習を始めるにあたり、本学級で日々行っている家庭学習での音読を継続することで文章の概要理解が図られ、スムーズに学習に入れる。

第Ⅰ次では、指導者が作成した「どうぶつひみつクイズ」を出題し、動物の体の特徴や行動について「すごい」と思うことに興味や関心を持たせる。その後、扉絵を見ての感想やビーバーについて知っていることを発表させ本単元の学習へつなげる。次に音読後、この教材を通してビーバーの「すごい」や「すること」を見つけてクイズを作る。学習の最後にほかの動物についていろいろな本から、調べたことをもとにクイズを作るという学習

の流れを確かめる。その後、形式段落や「木を切り川へ運ぶビーバー」「ダム作りをするビーバー」「巣を作るビーバー」という三つの場面から構成されていることを確認する。また、動物について書かれた本を学級で何種類か事前に用意しておき、教科書の学習と並行して、自分の興味のある動物について調べることができるようにしておく。

第Ⅱ次では、三つの各場面で読み取りを行った後、次時で読み取ったことを答えにしたクイズを作る。読み取りでは事柄の順序に気を付けさせながらビーバーの体の特徴や行動について児童が「すごい」と思うところを見つけさせる。クイズを作る学習は計3回行う。1回目は、教師の見本を参考にビーバーの体の特徴について「すごい」と感じた文章をみんなで考え、選び出してクイズ作りをする。その中で、クイズに適した話型(※1)があることを知らせ、実際に児童の作ったクイズから見つけさせる。2回目は教材文や前時にまとめたノートからペアで「すごい」と感じたビーバーの行動や体の特徴についてクイズに適した話型を参考に答えと問題を作る。3回目はビーバーの「すごい」と感じた「行動」について一人でクイズを作る。発表はワークシートに作った問題をタブレット端末でモニターに映し出して行う。

第Ⅲ次では、他の動物の本や図鑑を読んで調べ「どうぶつひみつクイズ」を一人で作る。第Ⅱ次で学んだクイズの作り方を振り返り、「問題」と「答え」を考えさせる。「問題」と「答え」は文のつながりに気を付けさせながら指導者が机間指導をしていき一人ひとり指導していく。できた問題はペアで見せ合い、お互いの「問題」や「答え」が相手に伝わることを確認させる。そうすることで後のクイズ大会で発表するときの自信につなげる。その後、クイズ大会で用いる「もんだいカード」「こたえカード」を作成させる。ここでも指導者が見本を掲示し2つのカードの書き方の具体的なイメージを持たせる。最後に「どうぶつひみつクイズ」大会を行う。児童が作ったクイズは全体の前で発表する活動を通して、たくさんの方たちに伝えることで満足感や達成感を感じさせ、学習のまとめとして学級で振り返りを行う。

(※1) クイズに適した話型

クイズでつかう話型

9. 単元の指導計画（全13時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	<ul style="list-style-type: none"> ○教師が作成した「どうぶつひみつクイズ」を通して、学習課題を知る。 ・「ビーバーの大工事」の教材分を音読する。 ・本単元の見通しを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物について関心を持ち、意欲的に学習に取り組めるようにする。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○(仮)「木を切り川へ運ぶビーバー」「ダム作りをするビーバー」「巣を作るビーバー」という三つの場面から構成されていることを確認する。 ・各場面の名前を考える。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ビーバークイズ」、「どうぶつひみつクイズ」を作ることを伝える。 ・動物の図鑑や本を様々な時間で並行読書しておくことを伝える。 ・文面や挿絵をもとに3つの場面があることを確認する。 ・教材文や挿絵をもとに3つの場面の名前を考えさせる。 ・ビーバーの大工事を読んで思ったことを書かせる。
II	3	<ul style="list-style-type: none"> ○「木を切り川へ運ぶビーバー」について読み取る。 ・「すごい」と思う体の特徴を見つける。 ・ビーバーの体の特徴について「すごい」と思ったことを文章にまとめる。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビーバーの体の特徴を捉えやすいように具体物や写真を提示する。 ・「すごい」と思う体の特徴に線を引かせる。 ・教材文の線を引いた文章や児童の「すごい」と思った発言からビーバーの体の特徴をまとめさせる。 ・ビーバーの体の特徴について「すごい」と思った感想を書かせる。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ○「木を切り川へ運ぶビーバー」についてのクイズをみんなで作る。 ・作ったクイズから出てきたクイズに適した話型を確認する。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見本を掲示し、クイズ作りのイメージを持たせる。 ・みんなで前時のまとめたことや本文をヒントにクイズを作らせる。 ・できた問題と答えを共有する。 ・みんなで作成したクイズをヒントにクイズに適した話型を見つけさせ、共有する。 ・クイズ作りの感想を書かせる。
	5	<ul style="list-style-type: none"> ○「ダム作りをするビーバー」(前半)について読み取る。 ・「ダム作りをするビーバー」の行動をまとめる。 ・ビーバーの作るダムの絵を描く。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビーバーの行動を捉えやすいように具体物や写真を提示する。 ・ダム作りでビーバーの行うことに線を引かせる。 「ダム作りをするビーバー」の行動を順序にそってまとめさせる。 ・ダム作りの順序にそってダムの絵を描かせる。 ・ビーバーの作るダムについての感想を書かせる。

	6	<p>○「ダム作りをするビーバー」(後半)について読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ダム作りをするビーバー」の体の特徴を見つける。 ・ビーバーの体の特徴について「すごい」と思ったことを文章にまとめる。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビーバーの体の特徴を捉えやすいように具体物や写真を提示する。 ・「すごい」と思う体の特徴に線を引かせる。 ・教材文の線を引いた文章や児童の「すごい」と思った発言からビーバーの体の特徴をまとめさせる。 ・ビーバーの体の特徴について「すごい」と思った感想を書かせる。
	7 本時	<p>○「ダム作りをするビーバー」についてのクイズを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習を振り返る。 ・前回のクイズを振り返る。 ・クイズを作る。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のクイズ作りを想起させる。 ・前時で学んだビーバーの行動や体の特徴を振り返り、本時で作る「ビーバークイズ」を意識させる。 ・クイズに適した話型を振り返り、参考にさせる。 ・ペアで前時のまとめしたことや本文をヒントにクイズを考えさせる。 ・できた問題と答えを共有させる。 ・クイズ作りの感想を書かせる。
	8	<p>○「巣を作るビーバー」について読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「巣を作るビーバー」の体の特徴や行動を見つけさせる。 ・ビーバーの行動や体の特徴について「すごい」と思ったことを文章にまとめる。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビーバーの行動や体の特徴を捉えやすいように具体物や写真を提示する。 ・巣を作るビーバーで行うことやすごいところに線を引かせる。 ・教材文の線を引いた文章や児童の「すごい」と思った発言からビーバーの行動や体の特徴をまとめさせる。 ・ビーバーの行動や体の特徴について「すごい」と思った感想を書かせる。
	9	<p>○「巣を作るビーバー」についてのクイズを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クイズに適した話型を振り返る。 ・学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のクイズ作りを想起させる。 ・クイズを作るための話型を振り返させる。 ・一人で前時のまとめしたことや本文をヒントにクイズを考えさせる。 ・できた問題と答えを共有する。 ・クイズ作りの感想を書かせる。
III	10	○「どうぶつひみつクイズ」を作る。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前ておくことで、どの動物に用意しておいた図鑑や動物の本を読ませについて書かれた本の中からどの動物クイズを作るか考えさせる。 ・「ビーバーの大工事」で学んだクイズ作りの経験を活かし、取り組ませる。
	11	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな動物について調べたいか決める。 ・クイズの作り方を振り返る。 ・本の中からクイズの答えになるところを探す。 ・教師の見本を参考にクイズを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズに適した話型を参考にクイズを作らせる。 ・事前にペアの児童と発表の練習をさせる。
	12	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ大会で用いる「もんだいカード」「こたえカード」を作成する。 ・クイズ大会に向けて発表の練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの友だちに伝えることで満足感や達成感を感じさせる。 ・自信をもって発表させる。 ・単元を振り返らせ、感想を伝え合う。
IV	13	○「どうぶつひみつクイズ」大会を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの友だちに伝えることで満足感や達成感を感じさせる。 ・自信をもって発表させる。 ・単元を振り返らせ、感想を伝え合う。

10. 本時の学習(7/13)

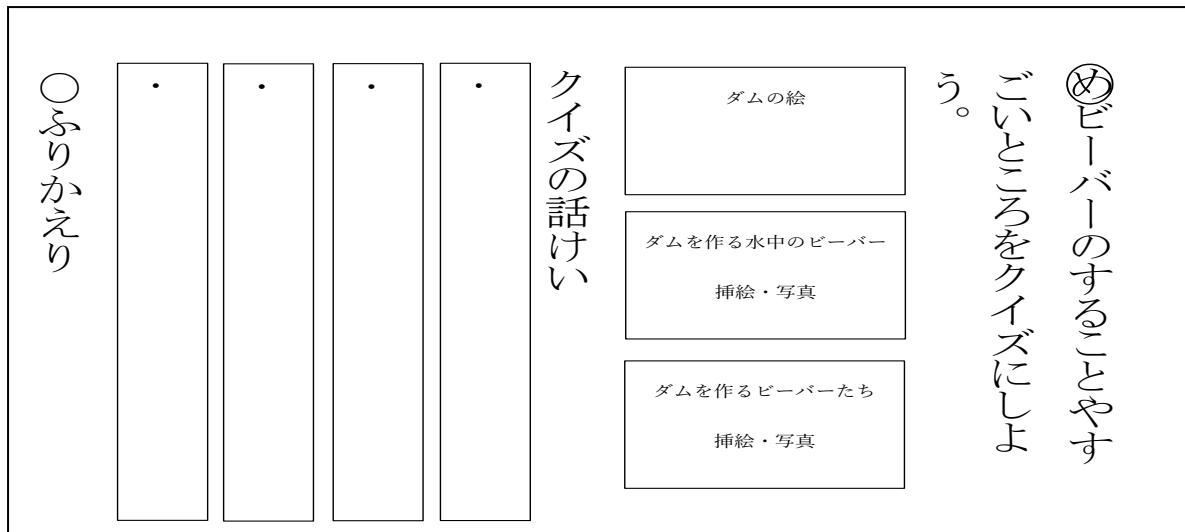
①本時の目標

- 大事な言葉や文を考えて選び出すことができる。
- ペアで互いの考えを伝え合いクイズを作ることができる。

②本時の展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 前時の振り返りをする。	・音読をさせる。 ・前時で学んだビーバーの行動や体の特徴を振り返り、本時で作るクイズを意識させる。	一斉	前時の学習を振り返ることができる。
精査・解釈	2. 本時のめあてを確認する。 ⑧ビーバーのすることやすごいところをクイズにしよう。			
	3. 前回のクイズ作りを振り返る。	・クイズに適した話型を想起させる。		クイズに適した話型を想起することができる。
考え方の形成	4. ダム作りをするビーバーのクイズをつくる。	・クイズに適した話型を参考にクイズの問題を作らせる。 ・早くできたペアには複数個クイズを作らせる。 ・机間指導しながら児童の作成したクイズをタブレット端末で記録する。	ペア	ペアで協力してクイズを作ることができる。
共有	5. クイズを発表する。 6. 学習の振り返りを行う。	・モニターにクイズの「問題」を映し出し発表させる。 ・クイズに適した話型を確認し、共有させる。 ・クイズ作りの感想を書かせる。	一斉	・クイズの書き方を通して、思ったことを表現することができる。

11. 板書計画



12. 本実践の考察

(1) 主体的な学びを生み出す工夫

本学習では主体的な学びを生み出すために児童が楽しく、興味をもって学ぼうとする姿勢が重要であると考えた。そのため「読み取ったことをクイズにして紹介する」という単元目標を設定した。また、学習の最後には、動物の本や図鑑から読み取ったことをもとにクイズを作成し交流する「どうぶつひみつクイズ大会」を行った。

どの児童も一人で動物の本や図鑑を参考にしてクイズを作ることができるよう、本単元の学習では次の二つのことに取り組んだ。

一つ目はビーバーのひみつとして「特徴」や「行動」について文章から読み取りやすくするために、「特徴」を「すごいところ」、「行動」を「すること」という言葉に置き換えた。そうすることで児童にとって言葉としてわかりやすく、スムーズに本文から見つけやすいものとなり、ビーバーのひみつに迫ることができた。

二つ目はクイズに適した話型を参考にクイズを作らせた。話型を見つける活動は、読み取り後のクイズ作りの場で毎回行った。文章を作ることに苦手意識を持っている児童も回を重ねるごとに自分でクイズを作れるようになった。

また、様々な話型を参考にクイズを作らせたことで学習の最後に行う「どうぶつひみつクイズ大会」では、多くの児童が様々な本や図鑑から見つけたひみつを答えにしたクイズを作ることができた。

(2) 対話的な学びを生み出す工夫

対話的な学びを生み出す工夫としてクイズ作りの際に一人で考えた後、「みんな」や「ペア」で相談させることで、学びを深められるようにした。はじめは、どのようにクイズを作ればよいか、どこをクイズにすればよいかわからない児童が多かった。しかし、先に完成した児童のクイズをみんなで交流させることで作り方の見通しを持たせることができた。

本時ではクイズ作りを「ペア」で行い、作ったクイズをみんなに発表する活動を行った。クイズ作りは、まず、前時の学習や読み取ったことを教科書やノートをヒントに一人で行った。そうすることで、ペアで交流させる際に児童は自分の考えを持った上で、その考えを伝えたり、友だちの考えを聞いたりする活動にすることができた。その後、発表は事前にペアで練習をさせた。ペアで練習をさせ

ることでどの児童も自信をもって発表することができた。また、たくさんの友だちのクイズを聞くことで新たな話型も見つけられるようにした。

学習の最後には「どうぶつひみつクイズ大会」を行い、できたクイズをペアで交流させた。ここでは、自分の作ったクイズを友だちに答えてもらい、話型にあてはまっているかや意味が伝わるか確認できるようにした。交流の場では、ペアでお互いの文章を見合い、相手に伝わりやすい文章と一緒に考える姿をたくさん見ることができた。また、「どうぶつひみつクイズ大会」本番では交流での成果もあり自信をもって発表することができた。

13. 成果と課題

- 児童にとって読み取りやすい言葉に置き換えたことで読み取りをスムーズに行うことができた。
- クイズに適した話型を見つけ、共有することで文章作りに苦手意識をもつ児童が「どうぶつひみつクイズ大会」に向けてスムーズにクイズを作ることができた。
- 事前に動物の図鑑や本を並行読書させたことで動物の特徴や行動への興味関心が高まった。
- どの児童も「動物ひみつクイズ大会」で自信をもってクイズを発表することができた。
- クイズ作りの回数が多かった。そのため、児童の作る問題が限定的になった。
- クイズに適した話型について本時の学習活動であてはまらないところが多かった。
- 児童の活動の様子を机間指導で確認する良い方法を考える必要がある。

第3学年

国語科学習指導案

1. 日 時 令和3年7月7日（水） 第5時限（13:50～14:35）

2. 場 所 第3学年2組教室

3. 学 年・組 第3学年2組 在籍28名

4. 単 元 名 こん虫のひみつについて説明しよう。

（「自然のかくし絵」東京書籍 3年上）

5. 単元間の関連

前単元（第2学年5月）

本単元（第3学年5月）

次単元（第4学年5月）

単元名

「たんぽぽ」

○説明の順序

単元名

「自然のかくし絵」

○段落の内容を捉える。

単元名

「ヤドカリとイソギンチャク」

○文章のまとめを捉える。

6. 単元の目標

- 段落ごとに文章の内容を捉えることができる。
- ・「問い合わせ」と「答え」の関係を理解して、読み取ることができる。
- ・段落相互の関係に着目しながら、昆虫の保護色について読み取ることができる。
- ・昆虫の保護色について、読み取ったことを基に説明しようとしている。

7. 単元の評価標準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none">・段落の役割について理解している。…（1）力・考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報の関係について理解している。…（2）ア	<ul style="list-style-type: none">・「読むこと」において、段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えている。…C（1）ア・「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことを共有している。…C（1）カ	<ul style="list-style-type: none">・これまでに学習したことを生かして学習課題を明確にし、積極的に、文章を読んで分かったことや考えたことを説明しようとしている。

8. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、2年生の時に「たんぽぽ」の学習で、説明の順序に着目し、時間的な流れに沿った説明の方法と、事柄のまとまりごとに説明する方法の2点を中心に学んでいる。

前単元の「すいせんのラッパ」での学習では、「○ページの○行目に書いてあるから～」と叙述を基に自分の意見を話す言語活動に取り組んだ。だが、文章から必要な言葉を見つけたり、自分なりの言葉にしてまとめたりすることに難しさを感じる児童が多かった。また、自分の考えを発表できる児童もいるものの、自信のなさや失敗を恐れるあまり、全体の場で発表する児童はいつも同じ児童になっている。さらに、自分の答えが合っているかどうか聞いてから発表する児童もいる。そこで、まずは自分の意見を発表できるように、毎時間、二人組のペアトークを取り入れてから、全体発表をさせている。加えて、終わりの会でスピーチを行い、少しづつではあるが全体の前で話す経験を積ませている。

ノート指導については、「書く時間」と「聞く時間」を分けて指導をしているが、書く時間が間に合わず話を聞けていない児童や、急いで書くため乱雑な字になっている児童も少なくない。また、自分なりに意見を文章化しようとするが、つながりのない文章や叙述を基にしていない文章を書いてしまう児童もいる。

(2) 単元観

本教材「自然のかくし絵」は、自然を生き抜く昆虫の保護色の役割や特徴について、具体的な例をあげながら説明している文章である。昆虫は児童にとって身近な存在であり、自分の知識や情報、体験を想起しながら興味、関心をもって読むことができるを考える。教材文では、「昆虫がどのように敵から身を隠しているか」ということを中心に説明しており、大事な言葉や文に着目しやすい。また、写真と文章を関連付けながら読むことで要点を捉えやすくなっている。教材文全体を通して、「はじめ」「中」「終わり」が明確であり、「中」では、「問い合わせ」に対する「答え」を示しながら説明している。さらに、文章の中で接続語が効果的に使われており、児童が文章を読み解くときだけでなく、自分で文章を書く時の参考にもなる。

本単元は、説明文において「読解の基礎」を身に着ける系統に位置づけられる。2年の「たんぽぽ」では、説明の順序に着目し、時間的な流れに沿った説明の方法と、事柄のまとまりごとに説明する方法の2点を中心に学習を進めた。本単元では、これらの学習を踏まえ、まず、「段落」とは何かを理解すること、さらに、各段落の内容を捉え、段落相互の関係を捉えられるようにすることを目指す。

(3) 指導観

本単元の第Ⅰ次では、導入で扉絵を見てどのような教材文か想像させることで、学習への興味を持たせる。その後、教材文の読み取りにつなげるために、繰り返し音読を行いスラスラと読めるようにする。だが、繰り返し読むことで、教材への興味や学習意欲を損なう可能性があるので、教師の後にまねっこ読みをしたり、つまらずに読めるか競わせたりしながら、読み取りの素地を作っていく。

第Ⅱ次では、昆虫の身の隠し方や保護色の役割について読み取っていく。読み取りを進めるために、まず、本教材に出てくる昆虫に着目させる。次に昆虫の身の隠し方が書いてある文に線を引かせる。そうすることで、必要な言葉を読み取ることができるよう段階的に支援していく。本教材に出てくる昆虫は3種類で、3通りの身の隠し方がある。その昆虫の身の隠し方を説明させる際、「コノハチョウの身の隠し方」を例示することで、後の2種類の身の隠し方の説明ができるようにする。さらに、昆虫同士の身の隠し方の違いを考えさせることで段落相互の関係に着目できるようにしたい。

第Ⅲ次では、学習の題材であった「保護色」をテーマに、調べ学習を進めていく。本教材では、昆虫の保護

色について、いくつかの例示を基に学習をした。そこで、保護色について視野を広げ、ほかの虫や生き物について調べ、引用文献の叙述を基に、自分なりにまとめられるようにしていく。

9. 単元の指導計画（全10時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	<ul style="list-style-type: none"> ○扇絵を見てどのようなことが書かれているか想像する。 ○「だん落」という言葉の意味を確認する。 ○それぞれの段落の頭に、①から順に番号を書く。 ○全文を通読する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ふりがなを書く。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・扇絵を見せることで、教材への興味をもって意欲的に取り組めるようにさせる。 ・P38のつかむを読ませる。 ・文章の一字下げ部分に着目させる。 ・読み方のわからない言葉にふりがなを書かせる。 ・今日学習したことは何かを書かせる。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○本時のめあてをたてる。 ○全文を通読する。 ○難読熟語などの意味を理解する。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音読をするときの自分のめあてをたてさせる。 ・まねっこ読みをさせたり、どこまでつまらずに読めるか競わせたりすることを通して、内容の理解を深める。 ・音読をしながら、難しい語句の意味を理解させる。 ・今日学習したことは何か、自分のめあてに対してはどうだったかを書かせる。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ○全文を通読する。 ○「自然のかくし絵」に出てくる昆虫を文章から見つけ、線で囲む。 ○保護色とは何か考える。 ○昆虫の保護色の説明が書いてある文に線を引く。 ○学習の振り返りを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自然のかくし絵」では、何種類の昆虫が題材として登場するか、意識させる。 ・「保護色は何色ですか？」と問うことで、保護色の定義に迫らせる。 ・「たとえば」や「また」、「さらに」といった話題をつなぐ言葉に着目させる。 ・保護色について分かったことは何かを書かせる。
	4 本時	<ul style="list-style-type: none"> ○全文を通読する。 ○「問い合わせ」とは何か知る。 ○昆虫の身の隠し方（保護色の使い方）を説明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ペアで発表する。 ・全体で発表する。 ○昆虫の身の隠し方（保護色の使い方）の共通点と相違点を考える。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・p157を見て、「問い合わせ」とは何かを確認させる。 ・コノハチョウの例示を見せることで、トノサマバッタとゴマダラチョウの虫の身の隠し方を説明できるようにする。 ・⑦段落の「このほかにも」に着目させる。 ・保護色について説明できたか、昆虫による違いがわかったかを中心に振り返らせる。

	5	<ul style="list-style-type: none"> ○全文を通読する。 ○こん虫は、どんなときでも身を守ることができるのか読み取る。 ○保護色が役立つ場合について、説明をする。 ○保護色が役立たない場合について、説明をする。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「～でしょうか」という文から、二つ目の「問い合わせの文」があることに気付かせる。 ・「ところが」に着目させ、保護色が役立たない場合があることに気付かせる。 ・保護色がどう役立つかについてわかったことは何かを書かせる。
	6	<ul style="list-style-type: none"> ○全文を通読する。 ○段落ごとに書かれている文は何かまとめる。 ○保護色は「自然のかくし絵」だといえるのか考える。 ○ペアで「自然のかくし絵」といえるかについて話し合い、全体で発表する。 ○学習の振り返りをする。 ○次時の学習は何かを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「このように」に着目させ、まとめの文に入っていることに気付かせる。 ・どの段落を基に考えたかを示させる。 ・「自然のかくし絵」とは何かについて書かせる。
III	7 8 9	<ul style="list-style-type: none"> ○班で昆虫について調べたいテーマを決める。 ○学校図書館やタブレット PC を活用し、決めたテーマに沿って調べる。 ○模造紙に調べたことをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「保護色」だけでなく、様々な昆虫の特性があることを知らせ、調べることに対し、意欲を持たせる。 ・まとめる際、絵をかいたり、写真を添付したりしてもよいことを助言する。
IV	10	<ul style="list-style-type: none"> ○各班、昆虫について調べたことを、全体で発表する。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表を聞いた感想や、自分たちが調べて分かったことの他に、学習全体を振り返って書いてよいことを助言する。

10. 本時の学習(4/10)

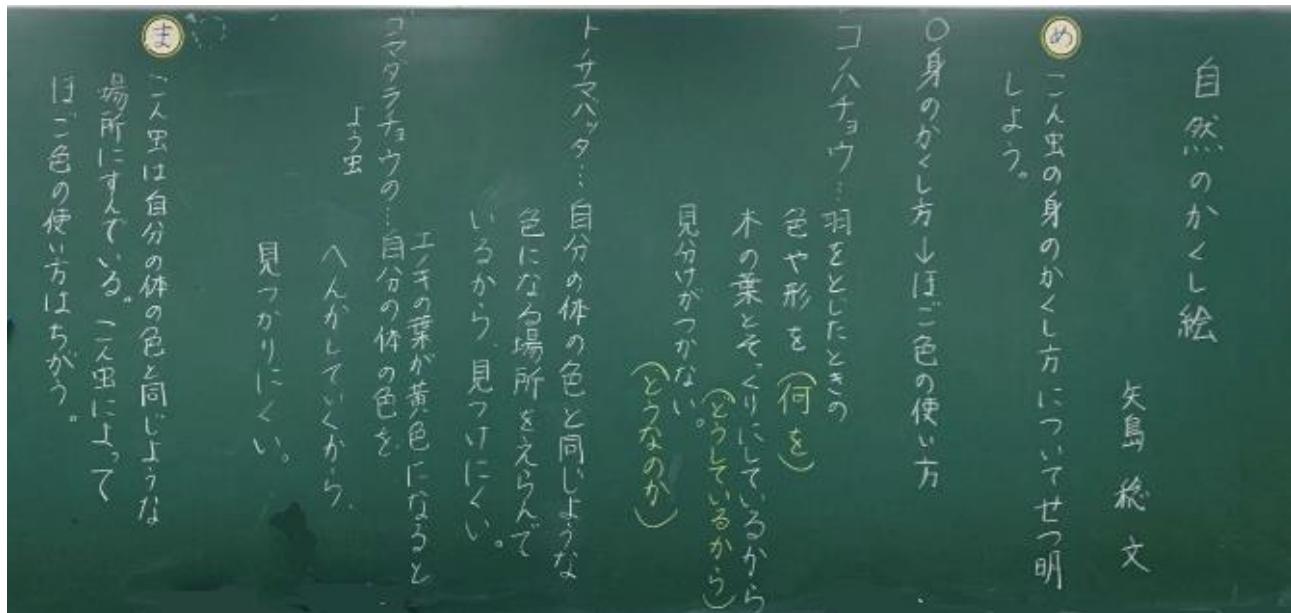
①本時の目標

○昆虫の身の隠し方について読み取り、説明することができる。

②本時の展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 全文を通読する。 2. 「問い合わせ」とは何かを確認する。 3. 本時のめあてを確認する。	• P157 を読み、「問い合わせ」とは何かを確認させる。	一斉	「問い合わせ」と「答え」の関係を理解することができる。
	④ こん虫の身のかくし方についてせつ明しよう。			
精査・解釈	4. 「コノハチョウの身の隠し方(保護色の使い方)」の説明の仕方を知る。	• 身のかくし方=保護色の使い方ということを確認させる。 • 例を提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 羽を閉じたときの色や形を 木の葉とそっくりにしているから 見分けがつかない </div>		
考え方の形成	5. 「トノサマバッタの保護色の使い方」と「ゴマダラチョウのよう虫保護色の使い方」の説明を考える。 6. 各昆虫の保護色の使い方を説明する。 7. 各昆虫の保護色の使い方の違いや同じところを考える。 8. 昆虫たちの保護色の使い方について考えたことを書く。(まとめ)	• 一人で考えさせた後、ペアで話し合うようにする。 • ノートにメモ書きさせてもよいことを伝える。 • ペアで決めた説明を、全体で発表する。 • 同じような説明でも発表してよいことを助言する。 • 昆虫たちの保護色の使い方について考えたことをノートに書かせる。	個別 ペア 全体 個別	• 昆虫の保護色について読み取ることができる。 • 叙述を基に、自分なりの文章で説明できる。
共有	9. 本時の学習を振り返る。 (振り返り)	• 本時の学習で保護色について説明できたか、昆虫による違いがわかったかを中心に振り返らせる。		• 学習を通して、わかったことや考えたことを共有している。

1.1. 板書計画



1.2. 本実践の考察

(1) 主体的な学びを生み出す工夫

本学級の児童は、長い文章を読むことに抵抗感をもつ児童が多かった。だが、単元の初めに、音読を中心とした学習をしたことで、「もっと読みたい。」「音読の宿題も余裕で読める！」と読むことに対する抵抗感がなくなり、意欲的に学習を進めることができた。また、すらすら読めるようになったことで、内容を読み取る活動も主体的に進められ、自分の考えを書こうとする姿が多く見られた。

前時までに、教材文に出てくる昆虫の名前を囲ませ、昆虫の身の隠し方に波線を引かせた。そうすることで、教材文の大事な言葉を見つけたり、関係する文章を見つけたりすることができた。

昆虫の身の隠し方を説明させる際、「何を・どうしているから・どうなのか」と柱を立て、コノハチョウを例示に全体で確認をした。考えの柱を示すことで、自分の考えを持てるよう段階的に指導した。

なかなか自分の考えをノートに書けない児童もいたが、何度も教科書を見返したり、柱に合わせて考えたりする様子が見られた。

ノート指導について、今までの国語科の授業とノートの使い方を変えた。今まででは、板書と同じように、教材文の内容をまとめるのに使っていたが、「考えをまとめるためのメモ」・「学習の振り返り」をメインに使うよう指示した。そうすることで、ノートを書く時間に縛られず、自分の考えを持ったり、話したりする時間に充てるよう計画した。だが、一部の児童の様子は、メモ書きよりも、話すための原稿づくりがメインになっていたため、話す・考える・書く時間を分けて考えるよう指導を続けていく。

(2) 対話的な学びを生み出す工夫

国語科の時間では、毎時間ペアで話し合う活動を取り入れた。また、他教科においても、ペアで考える時間を設けていた。ペアで考える前に必ず一人で考える時間を設けることで、話し合いがより充実するよう指導した。中には、自分の考えをノートを見せながら発表できる児童もあり、ペア活動が浸透してきたと言える。だが、ペア活動のルールや形式については決めていなかったため、今後改善していく。

本時では、自分の考えを持ち、ペアで話し合い、ペアで一つの意見として発表させた。そうすることで、自分と相手の意見を比べて、昆虫の身の隠し方をより簡潔に書けるようにした。また、児童一人ひとりが、学習に対する参加意識を持てるように構成した。

成果と課題

- 音読を中心とした学習を単元のはじめに設定したこと、すらすらと読むことができ、読み取りが苦手な児童も学習に意欲的に参加することができた。
- 昆虫の身のかくし方の説明を考える際、柱を立てた例を提示したこと、他の昆虫について考えを持ちやすくなった。
- ノート指導について、従来であれば教材の内容を書き写すことが多かったが、自分の考えのポートフォリオ的な使い方をさせたことで、多くの児童が書く時間に囚われず考える時間に重きを置くことができた。
- 昆虫の身の隠し方について発表させる際、ペアで一つの意見にさせたことで、自分の意見と相手の意見を比べさせることができた。また、授業に対する参加意識を向上させることができた。
- 本時の最初に、教材文を通読したが、単元計画の1・2時間目で内容の把握を行ったので、時間配分の点からカットしてもよかったです。
- 昆虫の身のかくし方について考えさせる際、全員ができるまで待つのではなく、少し考えさせてすぐにペアで話し合わせるとよかったです。そうすることで、考えを持てず困ることではなく、話し合いの中で意見を持たせることができたと感じる。また、一つの解を完璧に仕上げるのではなく、多くの児童から様々な意見を出させることで、全員で解をつくりあげる方がよかったです。
- 各昆虫の身のかくし方の違いや同じところを考える際、時間配分や児童の様子から、教師から答えを出してしまった。
- 学習のまとめをする際、保護色の使い方について考えたことを書かせるのに、「わかったことは何」と発問してまとめをしてしまった。どのような場面でも、抽象的でなく具体的に考えを持ちやすい発問を考えるべきであった。
- ペアで話し合うときのルールを明確に決めていなかったため、「相手にノートを見せる。」「相手の意見を聞いたらうなずいたり、違うところについて再度話し合ったりする。」「どちらから話すか。」など、ペア活動を行うたびにルールを確認する方がよいと感じた。

第4学年

国語科学習指導案

1. 日 時 令和3年10月20日（水） 第5時限（13:50～14:35）

2. 場 所 第4学年2組教室

3. 学 年・組 第4学年2組 在籍34名

4. 単 元 名 説明のまとめを見つけよう。

（「ヤドカリとイソギンチャク」東京書籍 4年上）

5. 単元間の関連

前単元（第3学年5月）

本単元（第4学年5月）

単元名

「自然のかくし絵」

○段落の内容を捉える。

単元名

「ヤドカリとイソギンチャク」

○文章のまとめを捉える。

単元名

「動物たちが教えてくれる海
の中の暮らし」

○主旨を捉える。

6. 単元の目標

- 段落相互の関係について理解し、文章の構成を捉えることができる。
- ・本文を「始め」「中」「終わり」に分け、大まかな文章構成を捉えることができる。
- ・説明のまとめに着目しながら読み取り、内容を短い言葉でまとめることができる。
- ・筆者の説明の仕方に対する自分の考えをまとめ、交流することを通して、学んだことを振り返っている。

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none">・指示する語句と接続する語句の役割について理解している。 …（1）カ・考えとそれを支える理由や事例について理解している。 …（2）ア	<ul style="list-style-type: none">・「読むこと」において、段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係について、叙述を基に捉えている。…C（1）ア・「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。 …C（1）オ・「書くこと」において、書く内容の中心を明確にし、文章の構成を考えている。…B（1）イ	<ul style="list-style-type: none">・これまでに学習したことを振り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、進んで段落相互の関係に着目し、文章のまとめを捉えようとしている。

8. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、昨年度の大阪市学力経年テストの「読むこと」の領域において、必要な情報を取り出す力、および目的に応じて大事な言葉や文を使って要約していく力に課題が見られた。児童は第3学年の「自然のかくし絵」で、段落ごとの内容を正しく読み、本文から必要な言葉を抜き出す練習をした。単元の学習を通じて、キーワードを見つけたり、文章の要点をとらえたりできるようになってきた。しかし、その段落どうしがどのようなつながりで文章を構成しているかについては十分に理解できていない。また、児童は読書に対して非常に意欲的であるが、文章が長くなったり、説明文になったりすると抵抗を感じる児童もいる。

「話すこと・聞くこと」に関しては、授業中の発表で話したいことはあるが、話している内に長くなってしまい、伝えたいことが十分に伝えられないという姿が見られる。自分の考えを明確にし、その事柄を中心に簡潔にまとめて発表することが苦手だと感じている児童は多い。そのことから、話型に沿って説明させたり、短い言葉でまとめようという声かけをしたりして発表を促すようにしている。このような取り組みから、簡潔に自分の意見を発表できるようになってきている児童も少しづつ増えてきた。

「書くこと」に関しては、視写のように決められた文章を書く時には自信を持って書くことができるが、文章を要約したり、感想を書いたりする場面になると手が止まってしまう児童もいる。また、口で伝えることはできるが、「書く」という手段になると途端に手が止まる児童も見られるため、文章の書き出しに苦手意識を持っている児童が多いのではないかと考える。それらを考慮し、文章の書き出しを示したり、例文を挙げたりすることで書けるようになってきた児童も見られるようになった。しかしながら、文と文を繋げる接続語が抜けていたり、話し言葉になってしまったりすることは今後の課題である。

(2) 単元観

本教材「ヤドカリとイソギンチャク」は、三つの問い合わせ順を追って答える形で、ヤドカリとイソギンチャクの共生の仕組みが説明されていく文である。全体の構成を見ると、「序論（話題提示）」、「本論（問い合わせ→実験・観察→答え）」、「結論（まとめ）」の12段落構成、尾括型の説明文である。
⑫段落「ヤドカリとイソギンチャクは、たがいに助け合って生きているのです。」という筆者の考えを伝えるために、構成や表現に様々な工夫がなされている。

一つ目は、三つの「問い合わせ」である。②段落で「なぜ、ヤドカリは、いくつものイソギンチャクを貝がらに付けているのでしょうか」という「問い合わせ」が出される。その後、一つの問い合わせが解決することで、次の「問い合わせ」が導き出されるようになっているので、読み手の思考も自然に流れようになっている。

二つ目は、三つの「問い合わせ」が、ヤドカリとイソギンチャク双方の側から述べられている点である。初めの二つの「問い合わせ」はヤドカリ側から、三つ目の「問い合わせ」がイソギンチャク側から述べられていることで、⑫段落の「たがいに助け合って生きている」の部分につながっている。

三つ目は、接続語の工夫である。「まず」「次に」「実は」「では」などの接続語に着目して読むことで、論理のつながりを捉えやすくなっています、「だん落どうしのつながりを考えて、文章のまとめをとらえよう。」というねらいに合致した教材であるといえる。また、筆者がどのようにヤドカリとイソギンチャクの助け合いを説明しているのかということを、段落のまとめやつながりに目を向けながら読み取らせることに適した単元である。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、第3学年で学習した「自然のかくし絵」の段落についての学習を想起させ、説明文には文のつながりがあることを確認する。本单元においても、説明文を構成する文章のまとまりがあることを確認し、読み進める。また、題名や写真を見せて「なぜヤドカリはたくさんのイソギンチャクを付けているのだろう。」という好奇心を引き立てながら読み始める。読後には、筆者はヤドカリとイソギンチャクの関係についてどのようなまとまりに分けて説明しているのか、という本单元の学習の見通しを持たせる。

第Ⅱ次ではまず、説明文を「始め・中・終わり」に分類する。さらに「中」には、作者の「問い合わせ」と「答え」で構成された三つのまとまりに分けられることを確認し、表に整理する。表に整理する際には、大事な部分はどの段落にあるのかを読み取ったり、まとまりを要約したりすることが重要になる。これらの取り組みは、児童が躊躇やすいものであるため、「ヤドカリは…」のような書き出しの文を提示したり、挿絵の通りに体を動かしたりして読み取れるようにしていきたい。

本時では、「ヤドカリはどうやって貝がらにイソギンチャクをうつすのか。」という作者の問い合わせに対する答えを要約する。ヤドカリがイソギンチャクを貝殻にうつす様子は順序立てて記述されており、それらの内容を要約することは簡単ではない。そこで、本文と挿絵を照らし合わせながら手順を確認し、ヤドカリがイソギンチャクをうつす様子を書けるようにする。さらに、それぞれの手順の中で大事な言葉を見つけ、それらを繋ぎ合わせることで文章を短くまとめることができるようになる。

第Ⅲ次では、筆者の説明のよさは何かを第二次でまとめた表を確認しながら考える。段落や文章のまとまりを順序よく並べることの利点や、事例の挙げ方やその順番にはどのような効果があるのかをまとめられるようにしていきたい。筆者の説明の仕方や工夫をまとめたり、友だちと交流したりすることにより、違う形式の説明文を読み進める際にも、内容を読み取るきっかけになると考える。

9. 単元の指導計画（全10時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	○これまでの学習を振り返り、本单元の学習の見通しを持つ。	<ul style="list-style-type: none">・三年生の「自然のかくし絵」で「段落」について学んだことを確かめ、段落どうしがつながって大きなまとまりを作ることを確認する。・題名と照らし合わせながら写真を見せ、なぜヤドカリがたくさんのイソギンチャクを付けているのか考えたことを発表させる。・ヤドカリとイソギンチャクの関係についての説明の仕方を考えながら一斉読みをさせる。・段落どうしの関係や説明の仕方について出し合った意見をもとに学習課題を立て、学習の見通しを持たせる。
II	2	○文章を「始め」「中」「終わり」の三つのまとまりに分ける。	<ul style="list-style-type: none">・前時に立てた学習課題を振り返り、本時では、文章の大まかな構成を考えさせることを確認する。・「始め」「中」「終わり」の三つに分けてワークシートに記入させる。・「中」について書かれた内容も、「問い合わせ」と「答え」に着目して三つに分けられることを確認し、ワークシート記入させる。

	3	○「始め」「中」「終わり」に分けたまとまりを表にして整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に文章全体を内容ごとのまとまりに分けたことを想起させ、そのまとまりを表にすることを確認する。
	4	○「中」の「一つ目の問い合わせ」の答えを教科書から見つけて短い文にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・表を整理すると五つのまとまりに分けられることを理解させ、これからこの五つのまとまりを短い言葉で要約し、表を完成させていくことを確認する。 ・②段落の「問い合わせ」を確認する。 ・「答え」を出すために実験をしたということ、どのような実験をし、どのような結果が得られたか、分かったことなどを読み取らせ、ワークシートに記入させる。 ・問い合わせの答えが書かれた⑥段落を要約し、前時の表にまとめさせる。
本時	5	○「中」の「二つ目の問い合わせ」の答えを教科書から見つけて短い文にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・⑦段落の「問い合わせ」を確認する。 ・ヤドカリがどのようにイソギンチャクを自分の貝がらに移すのかロス博士になつたつもりで挿絵を見ながらワークシートに記入させる。 ・ロス博士の観察から分かったことを要約し、表にまとめさせる。
	6	○「中」の「三つ目の問い合わせ」の答えを教科書から見つけて短い文にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・⑩段落の「問い合わせ」を確認する。 ・イソギンチャクにとっての利益は何かを「しかし」に着目し、「ヤドカリに付かない場合」と「付く場合」を対比しながらワークシートに記入させる。 ・⑪段落の「しかし」以降が、三つ目の「問い合わせ」に対する答えであることを確認し、要約したものを表にまとめさせる。
	7	○「終わり」を表にまとめて整理し、筆者が一番伝えたいことは何かを表と教科書から考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・⑫段落の最後の一文で、主語が「ヤドカリとイソギンチャク」になっていることに着目させて要約し、表にまとめさせる。 ・完成した表を確認しながら、この文章で作者が最も伝えたいことは、どの段落に書かれているのかを考えさせる。
III	8	○筆者の説明のよさは何かを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでにまとめた表を見ながら、作者の事例の挙げ方など、説明の文章の工夫に着目させる。 ・「終わり」を伝えるために、「中」がなぜ必要なのかを問い合わせ、事例や具体例が重要であることを気づかせる。 ・まとめた表や話し合ってきたことを基に、筆者の論の展開のよさについて、自分の考えをまとめさせる。
IV	9	○「ヤドカリとイソギンチャク」を読んで学んだことを伝え合い、学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で作者の説明のよさに触れたことを活かし、「だん落や文章のまとまりを整理する工夫」「事例のあげ方や順序について読み取る工夫」について考えをまとめさせる。
	10		<ul style="list-style-type: none"> ・まとめたものを読み合ったり発表し合ったりして、学んだことを確かめさせる。 ・本単元の学習で学んだことを、説明文の構成に触れながらまとめさせる。

10. 本時の学習(5/10)

①本時の目標

- 「問い合わせ」と「答え」に着目し、ヤドカリがどうやって貝殻にイソギンチャクを付けるのかを正しく読み取り、問い合わせに対する答えを短い文章にまとめることができる。

②本時の展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	<p>1. 本時の課題を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 既習の内容を確認する。 音読をする。 まとまり②(形式段落⑦～⑨)を一人読みする。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時で学習したまとまり②はどのような構造であったのかを確認する。 前時で学習したまとまり②と本時で学習するまとまり③を比較しながら音読するように促す。 本時の課題を提示し、プリントに書くように指示する。 	<p>一斉 個人</p>	<p>・「問い合わせ」と「答え」の関係を理解することができる。</p>
	<p>⑥二つ目の問い合わせに対する答えを教科書から見つけ、要約しよう。</p>			
精査・解釈	<p>2. 見通しを持つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「答え」はどの段落に書かれているのかを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時(まとまり③)の問い合わせを教科書から見つけ、ワークシート記入させる。 まとまり②の「問い合わせ」と比較し、本時は「どのように～でしょうか」という問い合わせになっていることを確認する。 問い合わせに対する答えはどの段落に書かれているのか、見通しを持たせる。 	<p>個人 一斉 一斉</p>	
考え方の形成	<p>3. ヤドカリとイソギンチャクがどのようにいっしょになるかを説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①～③の絵は、本文のどこを表したものかを書き出す。 ①～③の絵は、本文のどこを表しているのかペアに説明する。 全体で確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 挿絵と文章を照らし合わせ、それぞれの絵は本文のどの部分にあたるのかを教科書から見つけて記入させる。 ロス博士になって友だちに説明するようなイメージを持たせてペアに説明させる。 絵と文章が対応しているのか黒板の挿絵を見ながら確認する。 	<p>個人 ペア 一斉</p>	<p>・挿絵と文章を照らし合わせ、文章のどの部分がどの絵に該当するのか理解できる。</p> <p>・ヤドカリの手順に沿って説明することができる。</p>

	<p>4. 「問い合わせに対する答えを要約する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人で考える。 ・自分が要約した「答え」をペアに説明する。 ・全体で確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・二つ目の「問い合わせ」の答えを「ソメンヤドカリは…」の書き出しから短い言葉でまとめるように指示する。 ・要約する時には、大事な言葉を探して、それを繋ぎ合わせて書くように指示する。 ・要約した文章をペアで説明し合って確認させる。 ・児童の要約した「答え」を黒板に板書し、よりよいまとめ方は何かを全体で考えさせる。 ・第3時で作成した表に本時の要約できた文章を記入する。 	<p>個人</p> <p>ペア</p> <p>一斉</p>	<p>・説明のまとまりに着目しながら読み取り、短い言葉でまとめることができる。</p>
	<p>5. 本時の学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作者の問い合わせに対する答えを読み取ることができたか、問い合わせに対する答えを短い言葉でまとめることができたかを中心に振りかえさせる。 	<p>個人</p> <p>一斉</p>	<p>・本時の学習を振り返ることができる。</p>

11. 板書計画



12. 本実践の考察

（1）主体的な学びを生み出す工夫

本单元の目標单元は「説明文のまとめを見つけよう」であり、段落相互の関係について理解し、文章の構成を捉えられるようになることが目標である。このような目標を達成するため、大きく二つの手立てを用意し、実践した。

まず一つ目は、段落相互の関係について理解できるように、説明文を「始め」「中」「終わり」という三つの大きなまとまりに分類させることである。この際に意識した手立ては、まとまりを分類する時のキーワードになる接続語や時系列の変化に繋がる実験や事例の始まりの言葉に着目させることである。本教材は大変分かりやすくまとまりを区分することができる教材であり、児童らはキーワードを自分たちの力で見つけ出し、意欲的に分類することができていた。さらに、五つのまとまりに分類する際にも、前時で学習した「始め」「中」「終わり」を分類した時の学習を振り返りながら、実験や事例の中に書かれている重要なキーワードを読み取り、まとまりを捉えることができるようになってきた。

二つ目は、五つのまとまりの内部に着目し、それぞれのまとまりを短い言葉で要約させることである。児童らは、これまでの傾向から、必要な言葉を本文中から見つけ出すことは得意に感じている一方、解答を短い文章に要約したり、自分の気持ちを表現したりする創作課題に苦手意識を感じているようであった。これらの課題を解決するため、要約する際に重要な語句や文章に線を引かせ、それぞれの言葉を繋ぎ合わせる技法を丁寧に指導した。本教材には、ヤドカリがイソギンチャクを貝がらにつける様子の挿絵が細かく描写されており、語句と挿絵を関連付けながら指導することができる。児童は、挿絵から重要な言葉を見つけだし、文章を組み立てる時の順序や接続語の使い方も自身で工夫しながら考えられていた。一方、重要な言葉は抜き出すことができたが、それを繋ぎ合わせてまとめることができずに手が止まってしまう児童も少数見られた。また、意欲的に文章を作ることができたが、短くまとめることができずに、要約という形にならない解答も幾つか見られた。

このような結果から、児童らにとって答えが明確に設定された課題に対しては、解決に向けて意欲的な態度で取り組むことができるが、一方、様々な解答のパターンが想定される課題では依然として苦手意識を抱いている児童がいることだ。これらを解決するためにも、引き続き文章を要約する課題を積み重ね、反復させていくことが重要であると考える。また、苦手意識を持つ児童が自信を持って取り組むことができるよう、ペア学習などで自分の意見を友だちに伝え、自信を深められるようにしていきたい。

(2) 対話的な学びを生み出す工夫

これまで、答えは分かっているけど自信を持って手を挙げることができないという児童の姿がいくらか見られた。このような児童に対して、ペアの友だちと意見を交流したり、答えを確かめ合ったりすることで、自信を深め、積極的に授業参加できるようになってきた。本単元でも、短い時間でもペアで確認し合う時間を設け、自分の意見や答えを他者に伝える機会を意識的に増やしてきた。

本時の学習では、ワークシートを活用し、どの児童にも同じ挿絵が掲載されたものを手元に置いてペア活動を行った。児童はワークシートに書かれた挿絵を指しながら友だちに説明する様子が見られた。とくに言語活動が苦手だと感じている児童や、文章を書くことが苦手な児童にとっては、挿絵や図を見せながら説明する方が容易と感じるのではないだろうか。また、友だちの考えを聞いて、さらに考え方を深めることができる面でも利点がある。とくに理解の優れた児童においては聞く力も堪能であり、相手の友だちの意見を補足したり、質問を投げかけたりする場面も度々見られた。このように良好なペア活動ができている例を全体に紹介したり、褒めたりすることで、クラス全体でペア活動の質が向上していると実感している。

一方、ペア活動における時間配分や、活用のタイミングなどには課題を感じている。本時では、授業の冒頭で作者の「問い合わせ」と「答え」を見つけ、ペアで確認する活動を行った。しかし、この活動で思った以上に時間を要してしまい、後の活動に影響を与えてしまうことになった。振り返ると、もっと簡潔に確認し、時間の確保を優先すべきであった。ペア活動のタイミングを見誤ったり、時間をか

けすぎたりしてしまうと、授業全体のバランスを崩してしまうことを理解し、改善する必要がある。授業づくりの際に、一番重要な活動を明確にし、そこに向けてペア活動やグループ活動を重点的に取り組んでいけるようにしたい。

13. 成果と課題

- 授業の中で「聞いて理解する」→「自分で考える」→「ペアに伝える」→「全体で発表する」というシステムが定着し、どの授業でも応用できるようになった。次にすることが明確になることで、児童の反応も良く、授業づくりもしやすくなった。
- 説明文を読むとき、文章のまとまりに注目して音読することができるようになり、発表する時も「○○の言葉があるので・・・と考えました。」というような理論を持って発表できる児童が増えてきている。
- 振り返りの時間を重視し、一人でも多くの児童の考えを全体で共有することができた。友だちの意見を聞いて、自分の意見に反映できるようになった児童も見られるようになった。
- 机間指導の際に、違う視点から解答できている児童を数名見逃してしまい、より深い学びに繋げる機会を逃してしまった。全体に目を通すことができるよう動線の仕方を考えるなどの工夫をしていきたい。
- 説明する時間が長くなってしまい、児童が自ら考える時間を十分に確保することができなかつた。短い言葉で簡潔に伝えられる言葉の工夫。また、全て理解させようとせず、児童に考えを委ねることも必要であること。

第5学年

国語科学習指導案

1. 日 時 令和3年11月24日（水） 第5時限（13:50～14:35）
2. 場 所 第5学年1組教室
3. 学 年・組 第5学年1組 在籍28名
4. 単 元 名 和の文化について調べよう
（「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」東京書籍 5年）

5. 単元間の関連

前単元（第4学年5月）	本単元（第2学年9月）	次単元（第6学年6月）
<p>単元名 みんなで新聞を作ろう 「みんなで新聞を作ろう」 ○知らせたいことを新聞で伝える。</p> <p>（第4学年10月）</p> <p>単元名 くらしの中の「和」と「洋」について調べよう 「くらしの中の和と洋」 ○調べたことを関係付ける。</p>	<p>単元名 和の文化について調べよう 「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」 ○必要な情報を見つける。 ○資料を使って説明する。</p>	<p>単元名 防災ポスターを作ろう 「防災ポスターを作ろう」 ○表現の効果を考えて報告する。</p> <p>（第6学年10月）</p> <p>単元名 町の未来をえがこう 「町の幸福論」 ○情報を関係付けて活用する。</p>

6. 単元目標

- 文章と資料を結び付けるなどして必要な情報を見付け、論の進め方について考えることができる。
 - ・情報と情報との関連付けの仕方を理解している。
 - ・構成や展開を考え、文章を引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。
 - ・書き表し方を工夫して、調べたことを報告するパンフレットを作ろうとしている。

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・情報と情報との関連付けの仕方を理解している。((2)イ)	<ul style="list-style-type: none">・「書くこと」において、筋道の通った文章となるように文章全体の構成や展開を考えている。 (B (1) イ)・「書くこと」において、引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。 (B (1) エ)	<ul style="list-style-type: none">・これまでに学習したことを振り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、積極的に必要な情報を見付けたり論の進め方について考えたりし、書き表し方を工夫して、調べたことを報告するパンフレットを作ろうとしている。

	<ul style="list-style-type: none"> ・「読むこと」において、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりしている。(C (1) ウ) ・「読むこと」において、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げている。(C (1) カ) 	
--	--	--

8. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、学習に対して意欲的に取り組める児童が多い。4年生の時には「みんなで新聞を作ろう」の単元の学習で事柄の順序に気をつけて文章を読み取り、文と文の続き方に気をつけながら文章を書く学習を行っている。1学期に学習した説明文「動物たちが教えてくれる海の中の暮らし」では、文章を「序論」「本論」「結論」の3つの構成に分け、それぞれのまとめを整理し、内容の中心や筆者の考えの中心を捉え、要旨を把握する活動を行った。また、「環境問題について報告しよう」の単元では、資料を用いて調べたことを、事実を中心に読み手に分かりやすく伝える文章を書き報告する活動を行っている。その際、資料をインターネットで見つけ、上手に活用して文章を書くことができる児童が多くられた。中には、自分の考えは持っているが、どのように、何から書けばよいかわからない児童が見られる。そして、自分の考えを順序立てて理由も含めて話せる児童も多く見られるが、考えは伝えられるがうまく話を組み立てられない児童もいる。

(2) 単元観

本教材「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」は、伝統的な文化に関するものの中でも児童が想起しやすい和菓子を題材としており、序論・本論・結論の構成が明確な文章である。また、和菓子を「歴史」「ほかの文化との関わり」「支える人々」の三つの観点から説明するという構成は、キーワードをもとに話すことに適しており、その後の調べ学習や調べたことを報告する活動へとつなげやすい教材である。さらに、説明にあわせて、写真や図表などの資料が用いられており、報告の文章をパンフレットにまとめる際の資料の活用へとつながることができる。

そして、和の文化について調べる活動を通して、複数の資料や本を目的を意識して読み、伝えたい内容や目的に合わせて必要な情報をつけることをねらいとしている。また、パンフレットを作ることを通して、目的に応じて集めた情報を関係付けて文章にまとめることもねらいとし、資料を生かして文章を書くことに適した単元である。

(3) 指導観

第一次では、和の文化について調べていくという単元のめあてを確認してから教材の内容の学習に入っていく。まず序論の部分から、取り上げている話題と3つの観点を明確にさせる。そして「和菓子は、どのようにして現代の形を確立していったのでしょうか。」の問い合わせを確認し、教材を読み取るにあたり常に意識して考えていくように学習の見通しを持たせる。音読練習では、

内容がおおまかに捉えられるよう、全体で確認しながら練習を進めていくようとする。音読がすらすらできない児童には読み仮名をふったり、読みやすく読点を打ったりして支援するようとする。

第二次では、本論を中心に読み取っていく。自分で考える時間を必ず設定し、自分の考えを持ってからグループで話し合う時間を設けるようとする。そして、資料の選び方やよさを確認することで、自分が資料を選ぶ時の参考にしてほしいと考える。

本時では、自分が考えた「和菓子は、どのようにして現代の形を確立していったのでしょうか。」の問い合わせに対する答えをわかりやすくまとめ、伝える活動を行う。自分で考える際、なかなか自分の考えをうまく書き始められない児童には、書き始めて少し経ってからグループで話す時間を取りことで、児童同士の活動の中でヒントを得てほしいと考える。文章の組み立てが難しい児童もいるため、教科書のキーワードに線を引かせ、内容を全体で確認してから一人の活動に入るようとする。

第三次では、和の文化についてグループで話し合い、パンフレットを作っていく。まず様々な和の文化を知るため、できるだけたくさんの資料を読ませるようにし、自分のお気に入りを見つけさせることで、学習に対する意欲につなげたい。また、自分たちで実際にまとめるに前に、筆者の書き方のよさを見つける活動を入れることで、自分が書くときの工夫として取り入れさせたい。発表では、ただパンフレットの発表を行うのではなく、調べてまとめてみて、和の文化に対する自分の考えも発表できるようにさせたい。

9. 学習計画（全13時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	○写真や題名をもとに、内容を想像して本文を読み、段落番号をつけ、単元全体のめあてを確認する。 ○序論部分から、取り上げられている話題を理解し、内容の構造をつかむ。	<ul style="list-style-type: none">・「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」の扉絵・題名から内容を想像し、交流させる。・「和の文化」について興味を持たせ、意欲的に学習に取り組めるようにする。・3つの観点「歴史」「ほかの文化との関わり」「受けがれてきたこと」を確認し、問い合わせにして、これから本論で読み取っていく内容を明確にさせる。
	2	○音読練習をし、おおよその内容を捉える。	<ul style="list-style-type: none">・何度も読み、内容を確認させる。
II	3	○本論を3つのまとめに分け、本論1つ目の「歴史」について整理する。 ○時系列に並べさせ、和菓子の歴史について理解する。	<ul style="list-style-type: none">・第1時で確認した3つの観点を確認する。・和菓子の歴史について、どのようにして現代の形を確立してきたのかを考えさせる。
	4 本 時	○本論2つ目の「ほかの文化との関わり」について整理する。 ○ほかの文化との関わりを簡単に説明できるようにする。	<ul style="list-style-type: none">・前時の学習をもとに、次は和菓子とほかの文化との関わりについて、どのように現代の形を確立してきたのかを考えさせる。

	5	<ul style="list-style-type: none"> ○本論3つ目の「受けつがれてきたこと」について整理する。 ○どのような人たちによって受けつがれてきたのかをまとめられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第3時と第4時の学習をもとに、和菓子の文化がどのように受けつがれてきたのか、どのようにして現代の形を確立してきたのかを考えさせる。 ・「まず」「また」「一方」という言葉に着目させるようにする。
	6	<ul style="list-style-type: none"> ○結論の内容を確認し、年表や写真（資料）の効果について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・結論を読み、筆者が最も伝えたいことをはっきりさせる。 ・筆者の資料の使い方・選び方から、意図が伝わる資料について考えさせ、自分が調べるときのヒントにさせる。
III	7	<ul style="list-style-type: none"> ○グループで調べたい「和の文化」について一人ひとり必要な情報を集め、内容を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料をできるだけたくさん読ませ、自分が書きたいお気に入りの資料を見つけるようにさせる。 ・伝えたい内容と資料が適しているか確認する。
	8		
IV	9	<ul style="list-style-type: none"> ○「和の文化を受けつぐ」での筆者の書き方のよさを読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者の書き方のよさを確認し、資料の使い方や発表の仕方を工夫させる。 ・できるだけたくさんのよさを見つけ、その中で自分が使ってみたい書き方の良さを、次時からパンフレットを書くときに使うようにさせる。
	10	<ul style="list-style-type: none"> ○「和の文化」について、グループでパンフレットを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わかったことを発表するだけでなく、「和の文化」についての自分の考え方や思いも書き、みんなに伝えるようにさせる。
	11	<ul style="list-style-type: none"> ○発表の練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループのみんなが発表するようにさせる。
	12	<ul style="list-style-type: none"> ○調べた「和の文化」について発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの発表で良かったところ・工夫しているところを交流させる。
	13	<ul style="list-style-type: none"> ○単元を通して学んだことを確かめ、振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・書き表し方を工夫して報告できたか振り返らせる。

10. 本時の学習（4／13）

①本時の目標

○本論②を読み、筆者の説明の観点を捉え、内容を簡単に説明することができる。

②本時の展開

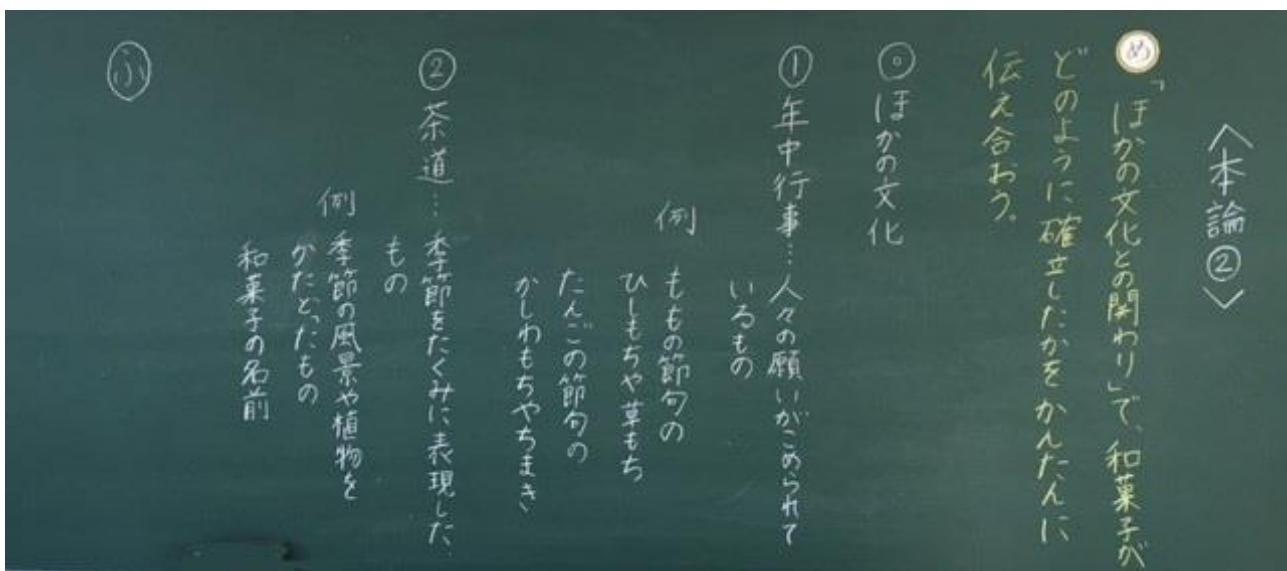
学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 前時の確認をする。 2. 本時のめあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本論に書かれている3つの観点を確認させ、本時は2つ目の「ほかの文化との関わり」について考えることにつなげさせる。 ・「どのようにして現代の形に確立していったのか」という問い合わせの確認もさせる。 ・本時の課題をノートに書くように指示する。 	一斉	・ノート

(め) 「ほかの文化との関わり」で、和菓子がどのように確立したかをかんたんに伝え合おう。

精査・解釈	3. ⑦段落から⑪段落を音読する。 4. 2つの文化を確認し、内容を確認する。 5. 「和菓子とほかの文化との関わり」について簡単にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・和菓子と結びついている文化は何があるかを考えながら読むようにさせる。 ・和菓子と「年中行事」「茶道」とのつながりを理解させる。 ・それぞれの和菓子にこめられているもの、例はどんなものがあるか、教科書に線を引かせ、全体で確認する。 ・和菓子と他の文化がどのように関わって今の和菓子が確立してきたのかが伝わるように、ノートに書くようにさせる。 ・できるだけ簡単に書くように指示する。 ・書き始められない児童がいたら、途中でグループ交流をし、書けていない児童のヒントになるようにさせる。 	一斉 個人 一斉 個人 グループ	・ノート

考え方の形成	6.まとめた内容について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで確認することで、自分の考えをさらに深めさせる。 ・友だちの考えには、うなずいたり返事したりして聞くようにさせる。 ・グループで発表する人を決めて、代表に発表させる。 	グループ	
	7.全体で確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめ方や説明のしかたなど、よいところを全体で確認するようにする。 	一斉	
共有	8.学習をまとめ、振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・わかったこと、考えたことを確認し、学習のまとめをさせる。 ・和の文化にさらに興味を持たせ、次時の学習につなげるようする。 	個人 一斉	

1.1. 板書計画



1.2. 本実践の考察

(1) 主体的な学びを生み出す工夫

本学習の単元目標は「和の文化を調べよう」であり、学習の最後には、グループで決めた和の文化についてパンフレットにまとめることを目標としている。そのため、和の文化のよさを感じ取ったり、筆者の書き方のよさを読み取ったりしていくことで、児童が見通しをもちらながら、意欲的にパンフレットを作ることができるように取り組んだ。また、できるだけ教師の働きかけを少なくし、児童同士がグループ交流を通して考える活動にすることで、主体的な学びにつながるよう心掛けた。そのために次の三つの手立てを中心に取り組んだ。

一つ目は、音読の支援である。教材文を読み込む時間を十分に取り、内容を全体で確認しながら音読練習を進めていった。音読がすらすらできない児童には読み仮名をふったり、読みやすく読点を打ったりして支援するようにした。そうすることで、普段音読が苦手な児童も内容が普段より捉えられるようになった。

二つ目は、学びを視覚的に捉えやすくする支援である。教科書の重要な文に線を引いたり、キーワードを四角で囲んだりする指導を行った。その結果、学習を振り返る時や自分の考えを書く時のヒントになり、自分の考えを進んで書けるようになる児童が増えた。

三つ目は、考えることをわかりやすく提示する支援である。筆者の問い合わせである「和菓子は、どのようにして現代の形を確立していったのでしょうか。」に対する答えを毎回見つけることで、その時間に考えるべきことがはっきりして、多くの児童がめあてを持って学習に取り組めていた。

これら三つの手立てを行った結果、パンフレット作りでは、それぞれが自分で考え、わかりやすくする工夫をして、主体的に取り組み、完成させることができていた。

(2) 対話的な学びを生み出す工夫

これまで、国語科に限らず様々な場面で、ペアトークやグループ活動を多く取り入れてきた。しかしそのなかでは、ただ話すだけだったり、書いたことを交流するだけだったりする姿も多く見られた。そこで、今回の「和の文化について調べよう」の学習では、自分で考える時間を必ず設定し、自分の考えをもってからグループで話し合う時間を設けるようにした。また、班長から話すようにしたり、周りの児童は話したことに対して頷いたり、いいところを伝えたりして聞くよう、話し合いのルールを全体で確認した。そうすることで、言いつぱなしのグループ活動にならないように工夫した。また、ペアではなくグループにすることで、人数も増え、考えを聞く機会も増えるため、自分の考えがさらに深まることを期待した。

本時では、自分が要約した「和菓子とほかの文化との関わり」について、グループで交流し、どの要約が一番わかりやすくて短くまとめられているかを選び、グループの代表が発表していく方法をとった。この方法だと全体で発表できる児童が限られるため、グループ交流の中では全員必ず発表する機会を設けた。選ばれた要約を全体で交流し、なぜその要約を選んだのかをグループの発表者以外に問うことで、全体の深い学びにつながった。またパンフレット作りでは、たくさんの資料を読んで自分の考えを持ち、テーマを話し合い、パンフレット作りの担当を決めるなどグループでの活発な活動が多く見られた。そのなかで、決まった観点について書いていく際、グループ内で「こう書いたらいいよ。」や「この資料使うとわかりやすいね。」といった声が聞かれるなど、教師からの支援はほとんどない状態で、自分たちで進んで取り組めていた。

今後も引き続き、全員がリーダーになれるくらい、よりよいグループ活動になるように指導していきたい。

13. 成果と課題

- グループ活動のルールを日頃から決めておくことで、スムーズに話し合い活動が行えていた。
- 教科書に線を引いたり全体で内容を確認したりすることで、必要なキーワードやキーセンテンスを自分で考え、まとめられる児童が多く見られた。
- 和の文化についてパンフレットにまとめる際、グループで協力しながら、学習した内容である要約の仕方や筆者の書き方の工夫をそれぞれがうまく使って書くことができていた。
- まとめていく時に、なかなか書き始められない児童が見られたため、文末指定や型を提示するなどして、もっとスムーズに書き始められるような手立てが必要であった。
- 教科書に線を引く際、児童自身がよりわかりやすく区別できるよう、直線や波線や色などをうまく使い分けるよう指導する必要がある。

第6学年

国語科学習指導案

1. 日 時 令和3年11月17日（水） 第5時限（13:50～14:35）
2. 場 所 第6学年1組教室
3. 学 年・組 第6学年1組 在籍32名
4. 単 元 名 町の未来を考えがこう/町の幸福論
(「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」東京書籍 6年)

5. 単元間の関連

前単元（第6学年5月）	本単元（第6学年11月）
<p>単元名 「イースター島にはなぜ森林がないのか」 ○筆者の論の進め方をとらえる。</p>	<p>単元名 「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」 ○情報を関連付けて活用する。 ○プレゼンテーションをする。</p>

6. 単元目標

- 複数の資料を読み、必要な情報を関連付けながら、それらを目的に応じて活用することができる。
- 自分の考えを伝えるために、構成を工夫したり資料を活用したりするなどの工夫をして発表することができる。
- ・情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。
- ・目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして、必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすることができる。
- ・構成を考え、必要な資料を作成し、プレゼンテーションできる。

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none">・情報と情報の関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使っていている。 …（2）イ	<ul style="list-style-type: none">・「話すこと・聞くことに」において目的に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討している。…A（1）ア・「話すこと・聞くこと」において資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫している。…A（1）ウ・「読むこと」において、目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりしている。…C（1）ウ・「読むこと」において、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分たちの考えを広げている。…C（1）カ	<ul style="list-style-type: none">・これまでの学習や経験を振り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、粘り強く必要な情報を見付けたり、積極的に表現を工夫したりしながら、町の幸福論について考えたことをプレゼンテーションしようとしている。

8. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、昨年度の大阪市学力経年テストの「読むこと」の領域において、課題がみられた。特に、「説明文の内容を読み取る」内容で、文章を読んで理解したことについて、自分の考えをまとめることの正答率が悪かった。

これまでに児童は、事実と意見の関係に注意して筆者の考えを読み取って自分の考えをもつたり、読み手を説得するための工夫を読み取ったりすることを学習してきている。6月の「イースター島にはなぜ森林がないのか」の単元では、文章の構成や、取り上げられている事例と筆者の考えの関係に注意して読むことができた。筆者の意見の裏付けには、いくつもの事実を例として取り上げられており、説得力のある論の展開になっていることを理解することができた。具体的な数値を挙げることや、写真や表の効果についても理解している。しかし、これらの学習を進める中で、筆者の考えを受けて、自分の考えをまとめることは十分に身についていないと感じられた。

「書くこと」に関しては、各教科の振り返りや感想など自分の想いを書くことは慣れている。長い文章を書くことはできるが、短くまとめることや要約することを苦手としている児童が多い。大切なキーワードを確認し、中心となる想いの文末表現に気を付けることを各教科で指導している。

「話すこと・聞くこと」に関しては、授業中に発表することが好きな児童が多いが、考えて発表する場合に、長くなってしまったり、何を伝えたいのかわからなくなってしまったりする児童も多い。また、各教科の学習でも意見の発表などはできるが、これまでに学んだ説得の工夫などを生かせていない児童も多い。そこで本単元では、教材文から主張や事例を理解しやすくするための表現方法を学び、それらを活用して最後のプレゼンテーションで自分の考えを工夫して発表することを常に念頭に置きながら学習に取り組ませたい。

(2) 単元観

本教材「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」は、実際にある町の様子についてまとめられている。町の課題や取り組み内容、そこに至るまでの思考が具体的に示されており、非常に理解しやすい文章内容となっている。また、「～できるのだろうか。」「もしあなたが～」などのような読み手に問いかける文も多用されており、児童が自分の問題として考えやすい。自分たちの町のよいところ、あるいはもっとよくしたいことを考え、町の「今」と「これから」について関心をもたせるために活用しやすい教材であることがわかる。

さらに、本教材は「コミュニティデザイン」という考え方の紹介を中心にしながら、大きな二つの視点（「住民が主体的に町作りに取り組むこと」「未来のイメージを思いえがくこと」）に基づいて、事例を挙げながら分かりやすく述べている。段落ごとのまとめも理解しやすく、説明内容に対応する写真や図表も、筆者の主張や事例を理解しやすくするために配置されているため、自分の考えをプレゼンテーションを通して伝える活動にも活用しやすいと考えられる。

文章の構成は序論・本論①・本論②・結論ととてもわかりやすい。「では」「～だろうか。」などの話題提示文も見つけやすい。大切なキーワード（コミュニティデザイン・人のつながり・主体的など）も何度も文中でてくることからも、それらのキーワードがまとめられている結論から要旨をまとめることもしやすい教材である。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、「町の未来についてプレゼンテーションを行う」という単元全体の学習課題を確かめる。自分たちの住む「東井高野」地域をよりよくするためのプレゼンテーションをする学習計画を立てることで学習意欲をもたせる。自分たちの町のよいところや困っていることなどについても話し合う場をもちたい。その際、デジタル教科書のコンテンツを利用しプレゼンテーションの大体をつかみ、方法について全体で共通の認識をさせ、今後の学習に意欲をもって主体的に取り組んでいけるようにしたい。

第Ⅱ次では、教科書の文章構成（序論・本論・結論）を捉え、筆者の主張を読み取っていく。本論1では、筆者の主張と筆者の挙げている事例がどのようにつながっているのか、本文に使われている事例を挙げることによってどんな効果があるのかを読み取らせていく。本論2では、「バックキャスティング」の考え方について学習する。文章と図を結び付けることにより、未来を描くための1つの方法であることを理解させ、自分たちのプレゼンテーションについて話し合う際にも取り入れられることを確認する。また、筆者が使用している資料について、文章とどういう関係があるのか、どのような効果があるのかを考えさせ、自分たちの資料選びの手助けとなるようにしたい。特に、「人と人とのつながり」というキーワードに着目し、住んでいる地域をよりよくさせるには人と人とのどのようにつなげればよいか、自分の考えをもたせる。

まとめることについて苦手な児童も多いので、他の教科でも大切なキーワードをもとに、短くまとめる活動を多く取り入れていく。まず結論部分を読み、筆者の伝えたいことをまとめさせる。「このように」から始まる結論部分に筆者の伝えたいことがあるとおさえる。中心となる想いの文末表現（～にちがいない）などに気を付けることに留意し、自分でまとめられるようにしていきたい。特に、筆者の「考える町の幸福について」まとめる作業を行うことで、文章の大切な部分を自分たちで見つけ、ペアや班での活動を通して、まとめる力をつけさせたい。

本時では、筆者の主張を再度捉えさせる為に、教材文のキーワードについて全体で確認する。大切なキーワードを全体で確認し、筆者の挙げる3つの事例を読み取り、まとめさせる。「主体的に行っているのはだれか」、「どんな人のつながりがあるか」、「これからどうなっていくのか」をまとめることで、それをもとに、自分の町の未来についての自分の考えをもたせる。また、自分の考えをもつ際には、結論の3つの観点「どんな未来に生きてみたいのか」「どんな生活なら豊かさを感じられるのか」「どんな町なら人々がつながりを感じ、幸せに暮らすことができるのか」を基に考えを広げていく。そこで出た考えを自分たちのプレゼンテーションの提案内容を話し合う第Ⅲ次に生かせるようにしていきたい。

第Ⅲ次では、伝えたいことが明確につたわるような構成・資料、断定的表現などの表現の工夫を意識させながら、自分たちのプレゼンテーションを作る活動を進めていく。総合的な学習の時間等も活用し、十分な時間を確保できるようにしたい。また、タブレット端末や発表ノートを使い、プレゼンテーションを作成させていきたい。発表になると長くなってしまったり、何を伝えたいのかわからなくなってしまったりする児童も多いので、大切なキーワードを中心に話すことや、話形に沿って説明させることで、簡潔に自分の意見を発表できるようにしていきたい。また、自分の考えをまとめられるように、第Ⅱ次から自分の考えをもつ場面を多く取り入れ、ペアやグループでの活動を通して、考えを深めさせていきたい。

9. 学習計画（全14時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	<ul style="list-style-type: none"> ○学習課題を確かめ、学習の見通しを立てる。 ・町の未来についてプレゼンテーションを行うという学習課題を捉え、学習の流れを確認する。 ・自分たちの町のいいところや課題点について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容に関心をもち、意欲的に学習活動に取り組めるようにする。 ・題名から想像したことを話し合ったり、内容を予想させたりする。 ・プレゼンテーションを行うために必要な力を確かめる。 ・町の催しや参加した時の体験について想起させ、その結果どのようなよいことが起きたのか問い合わせることで深く考えさせる。
II	2	<ul style="list-style-type: none"> ○「町の幸福論」を読んで、自分たちの町について考える。 ・教材文の構成を理解し、序論の内容を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者の主張を見付けるために、序論・本論・結論に分けさせる。 ・筆者の主張は序論と結論にあることに気付かせる。
	3 4	<ul style="list-style-type: none"> ・教材文の本論1・2の内容を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの事例を読み、内容を捉えさせる。 ・違う種類の資料と比較させたり資料がない場合と比較させたりしながら、資料のよさに気付けるようにする。 ・バックキャスティングの方法を理解し、文章と図を関係付けて読むようにする。
	5	<ul style="list-style-type: none"> ・結論部分から文章の要旨を読み取り、筆者の考える「町の幸福」についてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・結論部分を読み、筆者の伝えたいことをまとめさせる。 ・全文から、筆者の考える「町の幸福」についてキーワードをもとにまとめさせる。
	6 本時	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの事例から、町の未来についての自分の考えを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの事例を画用紙に整理させ、用いられている資料の効果やよさについてまとめさせる。 ・「主体的に行ってるのはだれか」、「どんな人のつながりがあるか」、「これからどうなっていくのか」をまとめてことで、それとともに、自分の町の未来についても考えられるようにする。 ・自分たちのプレゼンテーションにつなげられるようにする。 ・筆者の事例を参考に、自分たちの町の未来についての自分の考えをもつ。
III		○町づくりについて調べて、プレゼンテーションを行う。	

	7 8	<ul style="list-style-type: none"> 複数の資料を読み、発表に必要な情報を集める。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時に各自考えた町の未来についての自分の考えを交流させる。 自分たちの町の未来の姿について考えながら、情報を集めさせる。 グループ内で情報の内容や、情報収集の方法に偏りがないか確認させる。
	9	<ul style="list-style-type: none"> 集めた情報を整理して提案することや事例を決め、プレゼンテーションに必要な資料を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 提案の内容や事例の取り上げ方を押さえさせる。 事例について話す内容を決め、必要な資料を考えさせる。
	10	<ul style="list-style-type: none"> 伝えたいことに合わせてプレゼンテーションの構成を決め、必要な資料を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーションで提案する内容について話し合わせ、発表原稿を考えさせる。 プレゼンテーションの構成や必要な資料の確認をさせる。
	11	<ul style="list-style-type: none"> 構成に沿って、用意した資料を用いながら発表する練習を行い、説得力のある話し方の工夫を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書p. 152・p. 153の話例を聞かせたり、実際のプレゼンテーションの映像を用意して見せたりして、聞き手に提案のよさが伝わる話し方の工夫を考えさせる。 実態に応じて、発表メモや発表原稿をつくりながら練習させる。 「である」「ちがいない」などの断定的表現に着目させ、説得力を高める表現に気付かせ、プレゼンテーションの話し言葉を考えさせる。 本番では、原稿をできるだけ見ずに行えるように、簡潔にまとめた原稿が書けるようにさせる。
	12 13	<ul style="list-style-type: none"> 提案のよさが伝わるように聞き手を意識してプレゼンテーションをする。 	<ul style="list-style-type: none"> グループで互いの発表を聞いて、気付いたことを話し合わせる。 自分たちの発表内容と比べながら聞かせる。 改善点を話し合い、よりよい発表になるように推敲できるようにする。 原稿の暗唱ではなく、聞き手の反応を確かめながら話す意識をもたせる。
	14	<ul style="list-style-type: none"> ○読み取ったことをもとに、構成を工夫したり資料を効果的に活用したりするなどの工夫をしてプレゼンテーションを行うことができたのかを振り返る。 単元の学習を振り返り、町の未来についての自分の考えを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元全体を振り返り、分かったことや身についていたことを確かめる。自分の考えの広がりや深まりについて考えさせる。 聞き手の書いた感想カードをもとに、プレゼンテーションの振り返りをさせる。

10. 本時の学習（6／14）

①本時の目標

○筆者の挙げている例をもとに、町の未来について自分の考えを持つことができる。

②本時の展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	<p>1. 本時の課題を確認する。 ・音読をする。 結論を一人読みする。 ・既習の内容を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 筆者の主張がまとめて書かれているのは結論であることを確認し、大切なキーワード（コミュニティデザイン・人のつながり・主体的など）をおさえる。 前時までの学習を振り返り、本時では、筆者の挙げている例をまとめ、自分たちのプレゼンテーションにつなげていくことを確認させる。 	個人 一斉	
⑥筆者の挙げている例をまとめ、町の未来について自分の考えを書こ				
精査・解釈	<p>2. 見通しをもつ。 ・3つの事例のうち一つをまとめることを確認する。</p> <p>3. 3つの例のうち一つをまとめる。 ・本文を各自で読み、必要な部分をまとめる。 ・班で発表を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 大切なキーワード（コミュニティデザイン・人のつながり・主体的など）は何か問うことで、各事例のよさをまとめられるようにする。 3つの事例を画用紙に整理させ、用いられている資料の効果やよさについてまとめさせる。 「主体的に行ってはいるのではだれか」、「どんな人のつながりがあるか」、「これからどうなっていくのか」をまとめることで、それをもとに、自分の町の未来についても考えられるようにする。 	一斉 班	・自分の考えをもちながら読み取ったことをまとめることができる。

考え方の形成	<p>4. 自分たちの町について考える。 ・班で交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの町の特徴や営みについて感じていることや考えていることを確認する。 自分の意見と比較しながら聞き、質問したり感想をもったりすることができるようになる。 自分たちのプレゼンテーションにつなげさせる。 	ペア班	<p>・読み取ったことから、町の未来について具体的な考えをもつことができる。</p>
共有	<p>5. 自分の考えをまとめる。 ・学習の振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 筆者の事例を参考に、自分たちの町の未来についての自分の考えをもたせる。 「人と人とのつながり」を作るための取り組みを意識させて、自分の考えをまとめさせる。 次時からその方法を考えたり、資料を集めたりしていくことを伝えて見通しをもたせる。 全体の学習を振り返ることができるようになる。 	個人一斉	<p>・自分の考えを文章でまとめることができる。</p>

1.1. 板書計画

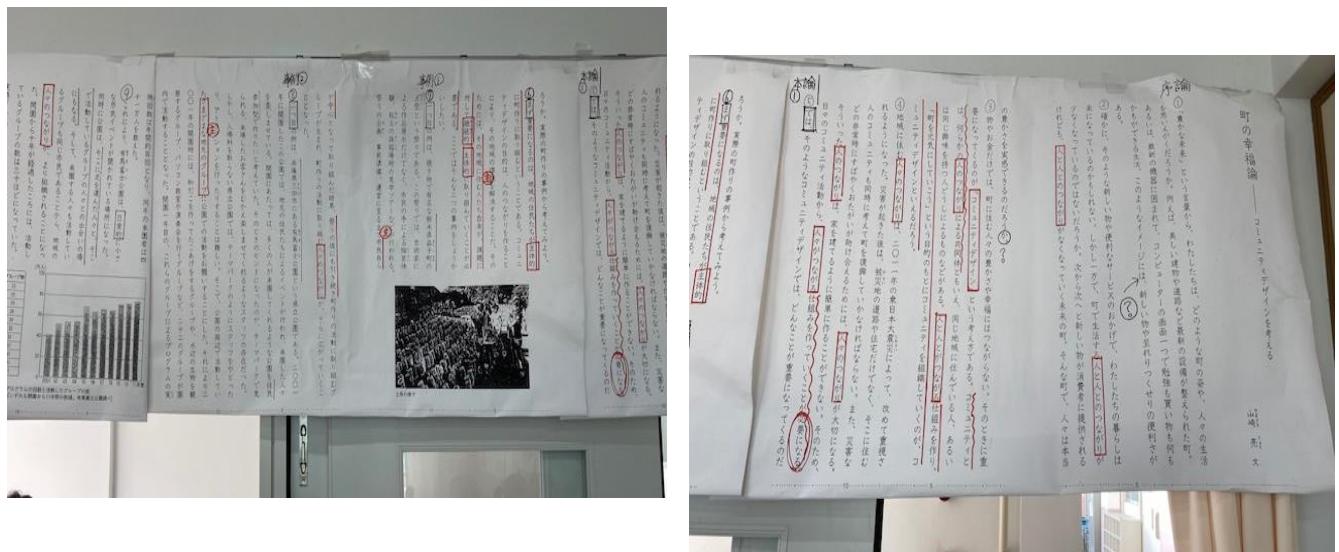


12. 本実践の考察

(1) 主体的な学びを生み出す工夫

本学習の単元目標は「町の未来をえがこう」であり、学習の最後には、グループでえがいた東井高野の町の未来について、タブレット端末を使いプレゼンテーションを行うことを目標としている。そのために、自分たちの住む「東井高野」地域をよりよくするために具体的な案を考えることで意欲的に、プレゼンテーションが行えるように取り組んだ。また、児童同士で「町の幸福論」の事例を参考に考えて、グループ交流を通して考える活動をすることで、主体的な学びにつながるように心掛けた。そのために次の二つの手立てを中心に取り組んだ。

一つ目の支援は視覚的な支援である。教科書の重要な文に線を引いたり、大切なキーワードを線で囲んだりする指導を行った。また、拡大した教科書を単元を通して教室に掲示することでいつでも見ることができるようにした。その結果、本時でのキーワードを見つけることや、プレゼンテーションを行う時のヒントになり、自分たちでまとめ、考えを書くときの助けとなった。



二つ目は、文章から大切な文を短くまとめる支援である。他の教科でも、文章を短くまとめることを多く取り入れてきた。必要な文章を見つけるためのキーワードを見つける指導を続けることで、自分たちで短く早くまとめることができるようになってきた。

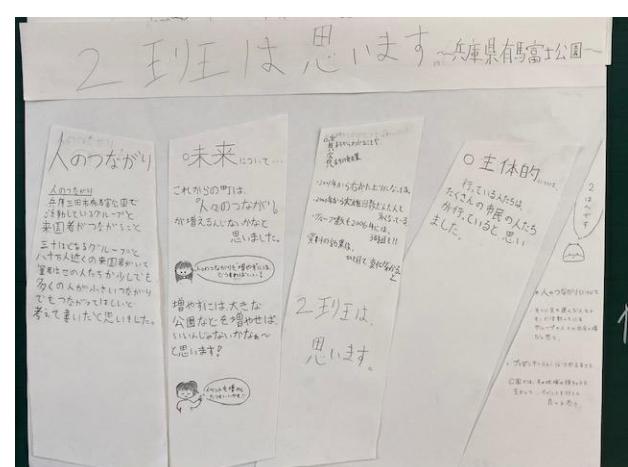
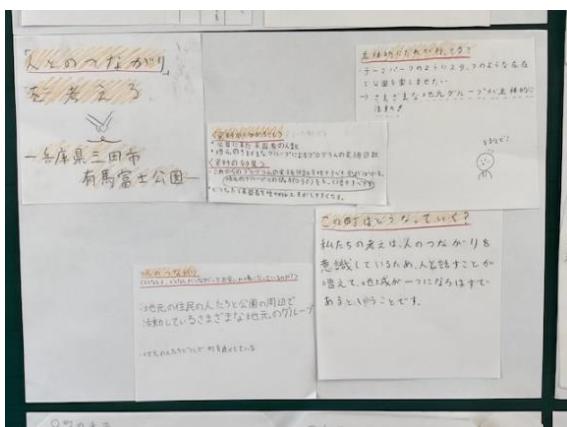
これら二つの手立てを行った結果、プレゼンテーションでは、それぞれが要点を短くまとめ、伝わりやすくする工夫をして、主体的に行いながら、完成させることができた。



(2) 対話的な学びを生み出す工夫

コロナ禍で、ペアやグループでの活動が少なくなる中、できるだけ多くのグループ活動を行ってきた。今まででは、グループで書いたことを交流するだけだったり、特定の児童だけが話をしたりする姿が多くみられた。そこで今回の学習では、自分たちで考えてまとめ、全員がその考えをもってグループで話し合う時間を設けるようにした。また、班でまとめるときに必ず全員で分担し、いいところをみんなでまとめていくことというルールを全体で確認した。そうすることで、班全員で考え、また全員が発表することができるように工夫した。

本時では、自分が要約したワークシートを持ち寄り、グループで交流し、各担当で一枚の画用紙にまとめるという方法をとった。この方法にすることで、みんなの意見をまとめ、一人ひとりが責任をもち、班での発表に臨むことができる。自分一人での要約に自信がなくても班のみんなの意見を聞くことで、自信をもって発表することができた。教師の支援がなくとも、わからないところがあつたら班で話し合い、活発に活動する児童が増えた。その後の活動でも、自分たちで進んで取り組み全員が活躍することができていた。今後は、よいところをもっと練り合うことのできるグループ活動になるように指導を続けていく。



13. 成果と課題

- グループ活動のルールを常に確認していたので、すぐにグループ活動に移ることができた。また、担当等もスムーズに決まり、とてもすばやくまとめることができた。
- 教科書に線を引いたり、拡大した教科書を掲示したりしたことで、文章の要点をすぐにつかむことができていた。
- 意欲的に進めることで、限られた時間内で考えまとめ、全員が全体で発表することができた。
- これからも総合的な学習と国語科の学習の違いを常に考えて指導をしていく必要がある。国語科で必要な力を国語科の時間に指導できるようにしていく。
- 時間内で多くの課題を与えたためでもあるが、書かせる作業も多くグループワークが話し合いではなく、一番いいものを取っていくだけとなってしまった。相互の意見交流へと変わっていけるように、話し合わざるをえない課題の設定などの工夫をしていく必要があった。
- 本時では、2つのことをもとめていたので、本時では「例から学ぶことを見つけよう」とシンプルにしてもよかったです。内容理解は目的をかえて何度も読むことで最終的に理解が深まるようにして要旨は、前時までの読み取りで終わり、グループでの活動に時間を多くとることができればよかったです。

1. 日 時 令和4年3月2日 5時間目（13：50～14：35）**2. 学級・学年** 第1学年～第4学年 15名 第1学年 4名 第2学年 3名
第3学年 1名 第4学年 7名**3. 場 所** 3階多目的室**4. 単 元 名** 見いつけた！**5. 単 元 目 標**

○たて割り集団で行う活動を通して、協力することや共同学習のよさを実感することができる。（コミュニケーション）

○ルールを知り、友だちと一緒に楽しく活動することができる。

○自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えようとすることができる。（国語科）

6. 指導にあたって**【児童観】**

本学級には、1年生から6年生の児童が在籍しており、学習の定着度や障がいの程度は個々で異なる。国語科の分野においても字を書くことに苦手意識を持つ児童や、説明を聞いてもすぐに理解することが難しい児童がいる。そのため、それぞれの実態に合わせて、入り込みや抽出での学習を行っている。入り込みでの学習では、指導者が個別に声をかけたり、挿絵や図を用いて物語の場面の状況や様子について説明したりすることで、不安な気持ちにならず、安心して授業に参加することができる。また、抽出での学習では、指導者と1対1で学習したり複数の児童と一緒に学習したりしている。一緒に学習する児童の中には、一人一人学習の理解度が違う場合がある。その時は、個に応じたヒントを見たり、指導者が個別に支援したりすることで、児童それぞれに合わせた学習を行っている。さらに、気心が知れた者同士で、互いに教え合いながら学習をすすめることができている。

休み時間になると、なかよしの教室にはいろいろな学年の児童が集まってくる。ブロックやパズル、かるた等で遊んだり一緒に絵を描いたりして過ごしている。基本的にはなかよく過ごせているが、友だちに自分の考えや思いを伝えきれなかったり、相手が話しているのを遮って一方的に話したりすることがある。そのことが原因でトラブルになることや悲しい思いをしてしまうことが多く、常に指導者の見守りやフォローが必要な状況である。

集団活動の「なかよしタイム」では、「ドミノ大会」を2度行った。1度目に行ったときは、「ドミノを立てている途中に、絶対に倒されたくない！」という気持ちでいる児童が多く、自分のことだけを考えてしまう姿が目立った。しかし、2度目に行ったときは、1度目の経験からドミノ倒しという活動内容に見通しを持ち、頑張って立てたドミノを他の児童が倒しても、「大丈夫大丈夫！」と声を掛けたり、「もお～」と冗談交じりで言い合ったりする姿が見られた。1度目よりも2度目の方がまわりへの意識の高まりが見られ、一団となって「ドミノ倒し」をすることができていた。

繰り返し集団活動を行うことで、集団で活動することには慣れてきている。しかし、一方では活動の説明を聞いている途中で違う場所に移動してしまう児童もいる。また、しっかりとルールを守ることや自分のしたいことを我慢して待つことができなかったり、思ったことをすぐに発言してしまったりする児童もいる。さらに、コミュニケーションにおいて、友だちや指導者の話を最後までしっかりと

と聞こうとしたり、相手に自分の思いを分かりやすく伝えようとしたりする経験がまだまだ必要な児童がどの学年にもいる。

【単元観・指導観】

本単元の「見つけた！」では、たてわりの3つのグループに分かれて「ちがい」を相談して伝えたり、「もの」を言葉で伝えたり相談し合ったりする2つの言語活動を行う。その中で楽しみながらルールを守ったり我慢したりする力やコミュニケーション能力を向上させることができるのである。

また、学習の意欲を高めるために、「がっこうパズル」をみんなで完成させるようにする。「ちがい」と「もの」それぞれの活動ごとに、伝えたり発表したりすることができれば、「1-1」や「図書室」など好きな教室のピースを選んではめていくようにさせる。「がっこうパズル」で学習の意欲を高めつつ、みんなで1つのものを完成させたという達成感を味わわせることで、協力することの大切さに気付かせるようにする。

指導要領では、以下の項目に該当する。

特別支援学校指導要録			
○自立活動			
(3) 人間関係の形成	ア	他者とのかかわりの基礎に関するこ	
(6) コミュニケーション	ウ	言語の形成と活用に関するこ	
○国語 A聞くこと・話すこと			
1段階	イ	身近な人からの話し掛けに注目したり、応じて答えたりすること。	(低学年)
2段階	ア	身近な人の話に慣れ、簡単な事柄と語句などを結び付けたり、語句などから事柄を思い浮かべたりすること。(低学年)(中学年)	
3段階	イ	経験したことを思い浮かべ、伝えたいことを考えること。(中学年)	

①「ちがい」を伝える活動（主に低学年を中心とした活動）

2つの絵の間違探しをたてわり班で協力して行う。1年生から3年生の児童が班の代表としてみんなの前で答えるという活動を行う。各班異なる絵をくじで選んで使用する。

間違探しでは、中学年の児童よりも低学年の児童は違いを見つけにくくと予想されるため、開始から15秒間は全員が静かに待つことをルールとして設ける。先に違いを見つけた人がいても、2つの絵を見比べ続ける状況をつくることで、みんなが1つのことを集中して取り組む経験を積むことができるようとする。また、見つけた違いを言いたくても我慢するという経験を積ませ、ルールを守ったり我慢したりする力を養えるようにする。

その後、班ごとに見つけた違いを他の班に発表していく。低学年の児童がみんなの前で探した間違いを詳しく伝えられるように、伝え方や発表の仕方を各班で話し合う時間を設ける。話し合いで困っている班には、「①と②の○○の□がちがいます」などのヒントが書かれたカードや絵カードが入った袋を渡すことで、話し合いがすすめられるようとする。話し合いで、身近な人からの話し掛けに注目したり応じたりして答えることを通して、人間関係の形成やコミュニケーション能力の向上をねらいとする。

発表に抵抗がある児童への配慮として、答える順は、「2・3年生→1年生」とする。また、具体的に違いを伝えられていない児童がいたときは、指導者が直接声かけを行い、より具体的に2つの絵の違いを答えられるようにする。いろいろな学年の児童の前で発表する経験を積ませ、少しでも発表に対する抵抗を減らすことをねらいとする。

「がっこうパズル」のピースは、間違いを見つけられたら1つ、発表することができたらもう1つ渡すようにする。うまく発表できない場合でも、ピースを1つゲットできたことで、自信を失わないようにさせたい。

②「もの」を伝える活動（主に第4学年を中心とした活動）

各班第4学年の代表の児童が動物や食べ物のカードを見て、思い浮かべた特徴を3つ伝え、同じ班の児童が話し合ってカードにかかれたものを当てるという活動を行う。名前からイメージが膨らませられない児童には、写真を見せて特徴を考えられるようにする。また、特徴の捉え方が分からぬ児童がいた場合は、指導者が「いろは〇〇です。」「あじは〇〇です。」と書かれたヒントカードを見せて、代表の児童が伝えられるようにする。形や色等の特徴を自分で考えにくい児童に対しては、特徴の選択肢が書かれたヒントカードを使用する。「もの」を思い浮かべて自分の知識と言葉を結び付けさせることで、相手にわかりやすく伝えようとする経験を積ませることをねらいとする。

話し合い後に答えがカードに書かれている「もの」と違った場合は、追加で代表の児童が特徴を伝える。その際、特徴が思い浮かばないときは、他の班の代表の児童が協力するようにし、正解に導くようにする。

また、特徴を聞いて答える児童には、理由も一緒に発表させることで、他の児童のイメージを広げたり、自分の思いを伝えようとしたりする機会を増やすようにする。理由を答える児童がいた場合は、「〇〇（特徴）だから、△△（答え）と思いました。」など、理由を答えるときの例を示したりするようにする。

「がっこうパズル」のピースは、指定された「もの」を伝えられた児童と答えられた児童にそれぞれ1つずつ渡し、パズルにあてはめさせる。

児童によっては、①～②の言語活動が難しい児童もいる。そのため、絵カード等を活用してヒントを見せたり答えを発表させたりするなど、個別に役割を持たせることで活躍することができるようになる。

また、間違い探しの答え合わせの時など、適宜ICTを活用することで、資料提示の時間を短縮して児童が活動する時間を確保したり、視覚的に分かりやすくしたりする。

7. 本時の学習

①本時の目標

- ・ルールを守って活動することができる。
- ・話し掛けに応じて自分の思いを分かりやすく伝えようとすることができる。
- ・名前や写真から物を思い浮かべることができる。

②本時の展開

学習活動	○指示や支援 ★発問
1. 本時の学習のめあてを確認する。	学習に楽しく参加できるようにする。 ○学習のめあてを黒板にはって全員で読んで確かめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">「がっこうパズル」をみんなであつめよう！</div>
	○集合して静かに話を聞いていることを確認し、「多目的教室」パズルを1つはって例を見せ、学習の意欲を高めさせる。 ○自分の思いや考えを伝えたり答えたりして2つの活動を行い、パズルを集めることを伝える。

<p>2. 「がっこうパズル」を集める学習を行う。</p> <p>①-1. めあてを確認する。</p>	<p>○活動のめあてを読んで確かめるようする。</p> <p style="text-align: center;">みつけたまちがいをくわしくつたえよう。</p>
<p>①-2. 活動の内容を知る。 (ルールの説明を聞く)</p> <p>①-3. 絵を選んで間違い探しを行う。</p> <p>①-4. 間違いの発表のしかたをグループで考える。</p>	<p>(活動①) グループで間違い探しを行い、見つけた間違いの伝え方を考える。その後、低学年の児童がみんなの前で間違いを詳しく伝える。見つけた間違いを伝えられたらパズルのピースを1つ手に入れることができる。</p>
<p>①-5. 班ごとに代表の児童が見つけた間違いを発表し、獲得したパズルをあてはめていく。</p> <p>②-1. めあてを確認する。</p>	<p>○指導者が指定した児童に絵を選ばせる。</p> <p>○開始から15秒間は見つけても静かにしておくことを伝える。</p> <p>★ 「①の絵の〇〇と②の絵の〇〇が違います。」と伝えてください。 分かりやすく伝えるためには、〇〇のところはどんな言い方をすればよいか、班で話し合って考えましょう。</p> <p>○答えが他の班に聞こえないような声の大きさで話し合うように、声をかけて意識させる。</p> <p>○話し合いで困っている班には、指導者が指定した児童に袋を配らせて、話し合いをすすめられるようにする。</p> <p>○違いを詳しく伝えられない児童がいたときは、指導者が質問することで、より詳しく伝えられるようにさせる。</p> <p>○その場で発表させることで、言葉で伝えるように意識させる。</p>
<p>②-2. 活動の内容を知る。 (ルールの説明を聞く)</p> <p>②-3. 指定された『もの』を伝えて答える活動を行う。</p>	<p>(活動②) 各班代表の児童（中学年）が指定された『もの』の特徴を3つ思い浮かべて、他の児童に伝える。他の児童は、指定された『もの』が何なのか班で相談し、理由をつけて答える。</p> <p>指定された『もの』と違う場合は伝える特徴を代表の児童で協力して考えて伝え、当たるまで繰り返す。</p> <p>指定された『もの』が当たれば、代表の児童と答えた児童は、1つずつパズルのピースを手に入れることができる。</p>
<p>3. 本時の振り返りをする。</p>	<p>○ルールを守ることができたか確認させる。</p> <p>○「がっこうパズル」をみんなで見て、活動を振り返られるようする。</p> <p>★自分や友だちのよかつたところを見つけた人がいたら教えてください。</p> <p>★うまく伝えられましたか。伝えるときに難しいと感じたことはありましたか。</p> <p>○今後も、自分の気持ちや思いを詳しく伝えるためにどうすればよいか考えさせる。</p>

8. 板書計画

<p>⑥ がっこうパズルをみんなであつめよ</p>	<p>1. まちがいさがし みつけたまちがいをくわしくつたえよう ・①のえの〇〇 と ②のえの〇〇が ちが います。</p>
<p>「がっこうパズル」</p>	<p>2. そぞうしてつたえる どんなものかを かんがえて つたえよう。 ・〇〇だから、～と おもいました。</p>

9. 本実践の考察

(1) 主体的な学びを生み出す工夫

授業のはじめに、「みんなで『がっこうパズル』を完成させる」という目標や「間違を探す」、「ものを伝える」という2つの活動内容を提示して確認させることで、児童に学習の見通しを持たせることができた。また、活動の内容やルールを詳しく説明する際、指導者の話を聞いただけでは理解しにくいことが予想されたため、ICTを活用して児童が視覚的に情報を取り入れられるようにした。そうすることで、2つの活動の内容やルールを理解させて何をすればよいか明確にすることができた。その結果、児童が主体的に学習できる状況をつくることができた。

教材については、「間違探し」という児童に馴染みがあつて楽しめる活動や「特徴を考えて伝える」という想像力を膨らませる活動を選んだ。間違を探したり、ものを想像したりするというみんなで楽しめるような活動を取り入れたことで、児童が意欲的に学習することができた。また、「間違探し」など、「遊び」の要素を入れつつも、たてわり班で相談して答えを考えるような場を設定したり、代表の児童や発表者など一人一人役割を持たせたりすることで、児童が主体的に活動する場をつくることができた。

(2) 対話的な学びを生み出す工夫

単に、「間違探し」や「ものを伝える」という活動をするのではなく、たてわり班で相談して答えを考えるようにしたり、発表の内容を話し合う時間を設けたりすることで、対話的な学びを生み出すようにした。特に、「間違探し」では、答えが分かった児童が同じ班の児童に答えを嬉しそうに伝える姿も見られた。答えを聞いた児童は大きくうなづいて納得していた。

話し合いを活発にするために、「間違探し」と「ものを伝える」活動でそれぞれヒントカードを提示した。

「間違探し」の話し合いの際は、話し合いがあまり進められていない班に、「間違探し」の答えや発表の仕方が書かれた話型などのヒントカードが入った袋を渡した。それをもとに、班の中で最上級生である4年生を中心に、話し合い活動が行われるようにした。

「ものを伝える」活動の話し合いの際は、代表の児童が伝えた特徴を自分で紙に書いたり指導者が紙に書いたりしたものを見ながら話し合いを進めるようにした。そうすることで、児童たちは、伝えられた特徴が何であったのか忘れることなく、話し合いを進めることができていた。

「間違探し」や「ものを伝える」活動での発表では、それぞれ話型を使い、答え方の例を示した。その結果、「間違探し」では、1年生も具体的に間違いを発表することができていた。「ものを伝える」活動では、どの特徴から想像できたのか理由を付けて、思いついたものを答えることができていた。

10. 成果と課題

- 「間違探し」では、「よ～いスタート」と指導者が小さな声で伝えることで児童が落ち着き、どの班も15秒間静かに間違いを探すというルールを守ることができていた。
- あまり発表が得意ではない児童も、たて割り班で発表の内容を一緒に考えることで自信につながり、みんなの前で答えを発表することができていた。
- 3つのグループに分けたり、一人一人役割を与えていたりすることで、普段すすんで話し合いをしない児童も、主体的に話し合いをして活躍することができていた。
- 主体的に話し合いをすすめられた児童がいる一方で、指導者の支援が多く、児童同士での対話的な活動は十分ではなく限定期であった。活発に話し合いをすすめさせるために、指導者が児童の話し合いに入らずに、もう少し遠くで見守る必要があった。
- 「ものを伝える」活動では、代表の児童が特徴を考える間、それ以外の児童の待つ時間が長かった。「間違探し」だけの活動にするなど待つ時間を短くするための工夫をし、対話的な学習の時間を確保する必要があった。
- 「がっこうパズル」を端の方に掲示してしまい生かしきれなかったため、盛り上がりに欠けてしまった。パズルを掲示する場所を真ん中にしたり1ピースあてはめるごとに声かけをしたりして盛り上げることで学習の意欲を高めつつ、振り返りを丁寧に行う必要があった。

III 研究のまとめ

1. 研究の成果

○学習の見通しをもつ時間の設定と、意欲が高まる学習課題の工夫（主体的な学び）

子どもの「読む意欲」を引き出したり、「読む必然性」をもつたりすることができるよう、事前に掲示物等の具体物の提示や関連図書の団体貸し出し、並行読書を行った。また、授業のはじめに、子どもと指導者が一緒に学習計画を立てたり、単元目標に即した言語活動の具体的提示を行ったりした結果、見通しをもって学習に取り組むことができた。

○対話から気付きが生まれる交流の場の工夫（対話的な学び）

ハンドサイン、声のものさし、聞き方・話し方などを教室に掲示した。また、全体で交流する前に、ペアやグループなど小集団での交流を効果的に取り入れ、意見の交流が活発に行えるような場を設定した。その際、話し合いの流れや話型を提示することでスムーズな話し合いの時間がもてた。

○自分の考えをもつための工夫（対話的な学び）

段落分けや小見出し付け、文章の要約を行う中で、キーワードやキーセンテンスをもとに筆者の主張を読み取ることができた。また、学習の流れに沿った板書を一トやワークシートとリンクさせることで、自分の考えをもって学習に取り組むことができた。

○自らの学びを説明したり評価したりする工夫（主体的な学び）

授業の最後に振り返りの時間を設け、自己評価できる欄を設けたり、一言感想や学んだことを短い文章で表したりした。学び方や内容の振り返りを通して、主体的に次時への見通しがもてるようになった。

2. 今後の課題

●学習の見通しをもつ時間の設定と、意欲が高まる学習課題の工夫（主体的な学び）

学習計画に沿って系統立てた指導をおこなったものの、同じ学習活動の繰り返しも多かった。子ども達の学習意欲が十分に高まるよう、変化のある学習活動を工夫していく。

●対話から気付きが生まれる交流の場の工夫（対話的な学び）

話し合いのルールの徹底が十分でなく、発表のメモを読むだけの発表や交流になりがちだった。また、考えを持てない子どもへの支援やグループワークのあり方にも課題がみられた。簡潔に伝える言葉の工夫も含め、発達段階に応じた対話的な活動の系統的なあり方を例示し、指標として活用していく。

●自分の考えをもつための工夫（対話的な学び）

例や文型を使うことで子ども達の思考が止まる側面もあった。必要に応じた文末指定や文型の提示を通して、より考えをもち、高めることができる指導を行っていく。

●自らの学びを説明したり評価したりする工夫（主体的な学び）

授業の振り返りでの自己評価を全体にフィードバックし、次時へつなげるようにしていく。

「話すこと」は、読み取ったことを考え、整理し、聞き手に伝わりやすい言葉にするという過程があるが、より聞き手に簡潔に要点を伝えるためには、「書くこと」を通して整理・言語化していくことが効果的であると考えられる。そこでモジュール学習等（読み聞かせや朝会等の話）を活用し、読み取る力につながる取り組みに加え、「聞く」「書く」学習活動を関連付けて行う。

また、読み取りの基本である「読書」についても、保護者アンケートや児童アンケートの結果から課題があると考えられるので、読書活動も推進していく。

おわりに

平成27年度より昨年度まで本校は算数科の研究を中心に取り組んでまいりました。結果、「東井高野スタイル」ともいえる授業スタイルを確立できたことが成果であると考えております。

今年度より研究教科を国語科に設定し、本校児童の課題である「書く力」を育成するための前段階として、説明的な文章を通して「読み取る力」の育成に取り組みました。また研究主題を「主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる」と掲げ、アクティブラーニングの観点における「主体的・対話的な学び」に焦点をあて、取り組んでまいりました。

本校で新規採用者として赴任し、国語科の研究が初めてである若手教員が多いため、思いあぐねる姿を多々目にしました。しかし、研究部を中心に中堅以上の教員が励ましたり助言したりする姿も同じように多々目にしました。全教職員が共に協力し合い、一丸となって主題に向かって邁進できたことが今年度の研究の大きな成果の一つだと感じております。

次年度におきましては今年度の成果と課題を存分に活用し、国語科における「東井高野スタイル」が確立できるよう、さらに研究を深めていく所存です。

最後になりましたが、大阪成蹊大学教授の辻村敬三先生、大阪市教育センター学力向上推進指導員の中村倫子先生には年間を通して、専門的な見地からご指導いただきありがとうございます。今後もより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申しあげます。

教頭 石塚 元一